三股町文化財調査報告書　第２集

SUWAMAWARI

諏訪廻第１遺跡

―町営墓地公園建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書―

2000年

宮崎県三股町教育委員会

三股町文化財調査報告書　第２集

SUWAMAWARI

諏訪廻第１遺跡

―町営墓地公園建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書―

2000年

宮崎県三股町教育委員会

遺跡遠景（東から、遺跡は写真中央）

序

本書は平成11年度、町営墓地公園建設に伴い三股町教育委員会が調査主体となり三股町大字蓼池字諏訪廻に所在する諏訪廻第１遺跡の確認調査報告書であります。

今回の調査によって、弥生時代後半から古墳時代前半の土器を伴った溝状遺構、時期不明の周溝状遺構が確認され、当地の歴史を解明していく上で重要な資料を得ることが出来ました。

本書が、地域歴史の正しい認識と理解、更には埋蔵文化財に対する理解を深める一助となるとともに、学術研究の資料として社会教育や学校教育の場で活用されることを期待します。

発掘調査に際しまして、地元の方々をはじめ、関係者の皆様には一方ならぬ御尽力を賜りました。

皆様に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成12年３月

三股町教育委員会
教育長　中　西　恭　昌

例　言

1．本書は、三股町大字蓼池字諏訪廻(※) 64番１ほか12筆における町営墓地公園建設事業に伴い、三股町教育委員会が平成11年度に発掘調査の委託を受け実施した諏訪廻第１遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、三股町教育委員会生涯学習課主任主事綿田賢介、同委託職員黒木欣綱が担当し、図面の作成については調査員２人で行い、一部を業者に委託した。

3．本書に掲載した遺物実測図は、黒木欣綱が作成し、浄書した。

4．遺構・遺物の写真は黒木欣綱が撮影し、空中写真は業者に委託した。

5。本書で使用した位置図は国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成した。

6．土層断面および土器の色調は、『新版標準土色帖』に拠った。

7．本書使用のレベルは海抜絶対高であり、基準方位は磁北である。座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。

8．本書で用いた略記号は次のとおりである。
　　SC－土坑、SE－溝状遺構、
　　SL－周溝状遺構、

9．本書の執筆・編集は黒木があたった。

10．出土遺物・その他諸記録は三股町中央公民館に保管している。

（※）当地の小字名について三股町郷土史研究会から「諏訪廻」ではなく「諏訪迫」ではないか、との御指摘があった。当報告書では調査依頼のあった事業主体者の町民生活課の提示した小字名を使用している。「諏訪迫」か「諏訪廻」かについては現在調査中のため詳しくは触れないが、小字名を遺跡名に冠すること、更には郷土史研究の観点からも今後明確にしていく必要がある。

本文目次

第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
第３章　調査の報告
　第１節　調査の概要 …… 3
　第２節　層序 …… 4
　第３節　Ｂ区の調査 …… 7
　　1　トレンチ１検出の土坑 …… 7
　　2　トレンチ11検出の周溝状遺構 …… 7
　　3　溝状遺構 …… 12
　　4　縄文時代の遺物 …… 16
第４章　小結 …… 18

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡周辺地形図 …… 3
第３図　基本土層図 …… 4
第４図　調査区地形図及び遺構分布図 …… 5～6
第５図　SC－１実測図 …… 7
第６図　SL－１実測図 …… 8
第７図　トレンチ11東壁土層断面図 …… 8
第８図　SE－１及び遺物分布図 …… 9～10
第９図　SE－１土層断面図（SEC１） …… 11
第10図　SE－１土層断面図（SEC２） …… 11
第11図　SE－１土層断面図（SEC３） …… 11
第12図　SE－１土層断面図（SEC４） …… 11
第13図　SE－１土層断面図（SEC５） …… 11
第14図　SE－１出土土器　古墳時代（前期） …… 12
第15図　SE－１出土土器　弥生時代（後期） …… 13
第16図　各トレンチ出土土器（縄文晩期） …… 16
第17図　各トレンチ出土土器（縄文後期） …… 16

表目次

第１表　諏訪廻第１遺跡出土土器観察表(1) …… 15
第２表　諏訪廻第１遺跡出土土器観察表(2) …… 17

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

三股町営墓地公園建設事業に伴い、三股町町民生活課から平成10年７月14日付で三股町大字蓼池字諏訪廻64番１ほか12筆における文化財所在の有無について照会があった。照会を受けた当教育委員会では当地が周知の遺跡であることから、平成11年１月27日付で宮崎県文化課埋蔵文化財係に職員の派遣を依頼した。その後、２月８日から９日にかけて調査対象地内に12ケ所のトレンチを設定し確認調査が行われた。６ケ所で縄文土器・弥生土器が出土し、１ケ所で竪穴住居の一部が検出された。確認調査の結果、墓地公園のうち管理棟（60㎡）部分については「恒久的な建築物」であるため全面調査を行い、墓域部分（6,160㎡）については遺物包含層及び遺構確認面は削平せずに盛土で遺跡は保存されるが、墓石が建立された後は、原則的には発掘調査は不可能である。これを受けて県文化課との協議の結果、全面調査を行っては事業計画に支障をきたすため、墓域の10％程度の詳細な確認調査を行い遺跡の保存対策のためのデータとして遺跡の内容･性格等の把握を行うこととなった。駐車場（1,960㎡）及び公園（6,587㎡）部分については遺物包含層または遺構確認面は削平せずに、盛土で遺跡が保存されるので発掘調査は行わないこととなった。

平成11年４月26日から管理棟部分の調査に着手し、平行して墓域部分の茶摘み、抜根の作業を島津茶園の方々が行った。

第２節　調査の組織

調査主体	三股町教育委員会		教育長	中西　恭昌
	〃	生涯学習課	課長	神宮司　学
	〃		課長補佐	二宮　利博
調査庶務	〃		主任主事	綿田　賢介
調査担当	〃		主任主事	綿田　賢介
	〃		委託職員	黒木　欣綱

調査作業　前田リツ　野口沢子　上石九州男　中山ミネ　初森トミ子　上水道夫
轟木葉子　橋口ハルエ　桑畑ミキ　園木スミ子　押方セツ子　小林文子
野崎エミ子　木下エル子　福留ノリ子　前田智　瀬戸山重則　和田繁
内田哲哉　久保福美　中原サツ子　小金信代　蔵元ミサ　児玉サチ子
蔵元ムツ　大盛玉子　大村ユリ子　古川博司　古川一子　田村豊
児玉信夫　徳重アキエ　上西チサ　上原アヤ子　久保ノブ子
久保田ミチ子　栗野文子　原田敬子　内村照子　小金井良子
安田政成　高野スミ子　隈崎トシ子　内山サヨ　鎌田春子　本田ヨシ子
吉村イツ子　今西富子

第２章　遺跡の位置と環境

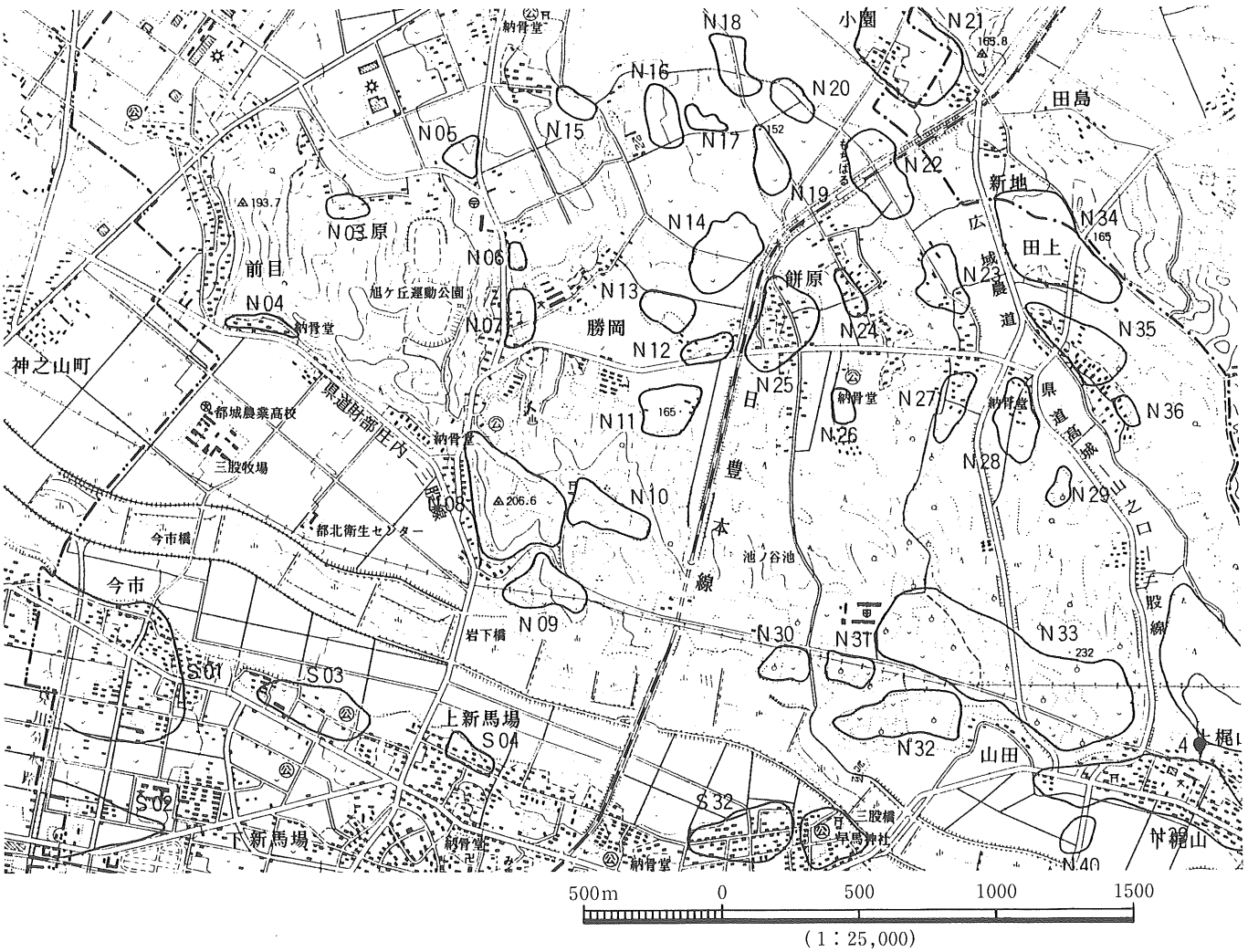
諏訪廻第１遺跡（町内遺跡番号：N09、第１図）は、三股町大字蓼池字諏訪廻に所在する。

本町は、都城盆地の東南に位置し、東部は鰐塚山系の分水界をもって南那珂郡北郷町及び日南市に、西部は都城市に、北部は北諸県郡山之口町、高城町及び宮崎郡田野町に隣接している。当遺跡は三股町の北西部の沖水川を南に望む丘陵の南端部に位置する。遺跡の標高は194～198mである。

当遺跡周辺の遺跡を概観すると、北西には中世の山城の勝岡城を含む牛ケ廻第２遺跡（遺跡番号：N08）が広がり、その東部には遺物包蔵地である諏訪廻第２遺跡（遺跡番号：N10）が広がる。

諏訪廻第２遺跡の詳細な調査は行われていないため当遺跡との関連性は考察できない。また、遺跡周辺は現在茶畑が広がり地形変化、遺跡破壊があったことが想像される。

（参考文献）
三股町教育委員会　「三股町遺跡詳細分布調査報告書」三股町分化財報告書第１集　1996
三股町史編集委員会「三股町史　改訂版」1985



Ｎ１：西原遺跡　Ｎ２：西原遺跡群　Ｎ３：出水遺跡　Ｎ４：筆無遺跡
Ｎ５：大原遺跡　Ｎ６：牛ケ廻第１遺跡　Ｎ７：南原遺跡　Ｎ８：牛ケ廻第２遺跡
Ｎ９：諏訪廻第１遺跡　Ｎ10：諏訪廻第２遺跡　Ｎ11：宮下遺跡　Ｎ12：中村遺跡

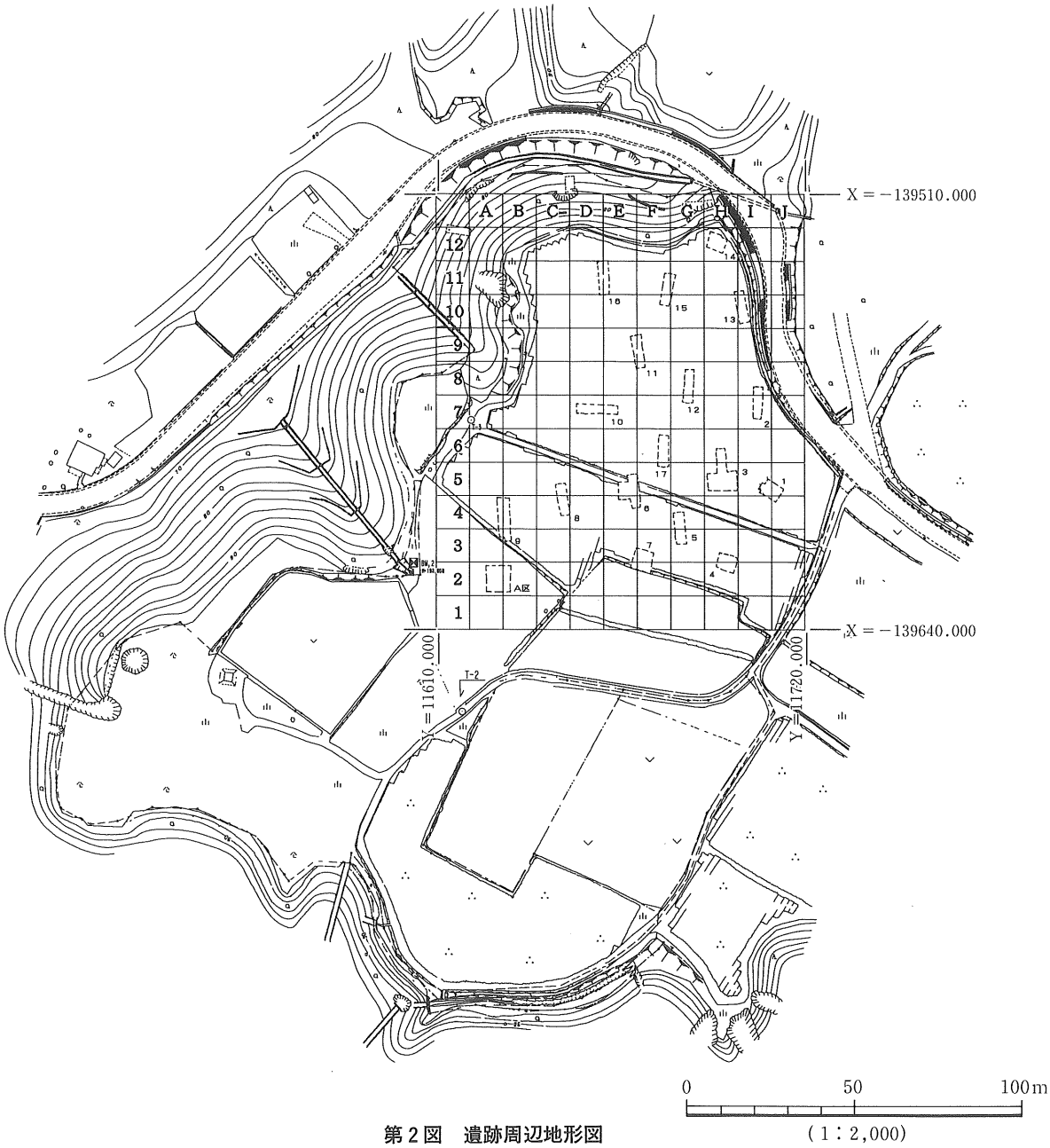
第１図　遺跡位置図

第３章　調査の報告

第１節　調査の概要

今回の調査区は、全面調査を行う管理棟部分（64㎡）をＡ区とし、遺跡把握の確認調査を行う墓域部分（6,160㎡）をＢ区とした。Ａ区は、約８ｍ×８ｍの調査区で表土を重機で除去した後、黒色土（第２層）の掘り下げを行った。Ｂ区は、茶畑の抜根後、任意に17ケ所のトレンチを設定した。Ａ区とＢ区の各トレンチとの位置関係を把握し測量実測の基準とするため、国土座標にあわせて10ｍ四方のグリッドを設定した。

Ａ区は調査対象面積約64㎡である。表土除去後、黒色土層（第２層）を掘り下げた結果、弥生時代の土器小破片３点が出土した。御池ボラ（第６層）上面を遺構検出面とし掘り下げ調査した結果、柱穴群を検出した。約64㎡という狭い調査面積において掘立柱建物の認定は困難であった。



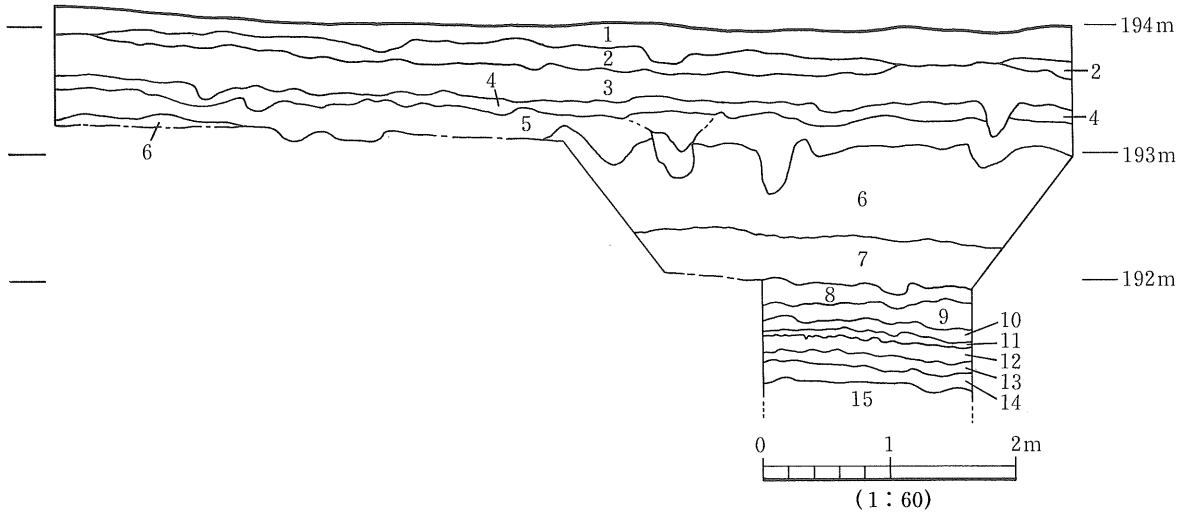
第２図　遺跡周辺地形図

A区においては、約４ｍ×４ｍの範囲で御池ボラ（第６層）より下層を深さ約２ｍまで掘り下げた結果、無遺物、無遺構であったため、御池ボラ上面までを調査対象としてA区の調査は終了とした。

B区の詳細については第３節で記述するが、今回の調査で検出された遺構は溝状遺構２条（トレンチ10で検出された溝状遺構は近現代のものと思われ割愛した）、土坑１基（時期不明）、周溝状遺構１基（時期不明）、柱穴群等がある。遺物は縄文時代後期～晩期の土器、溝状遺構（SE－１）内を中心として弥生時代後期の土器、古墳時代前期の土器等が出土している。

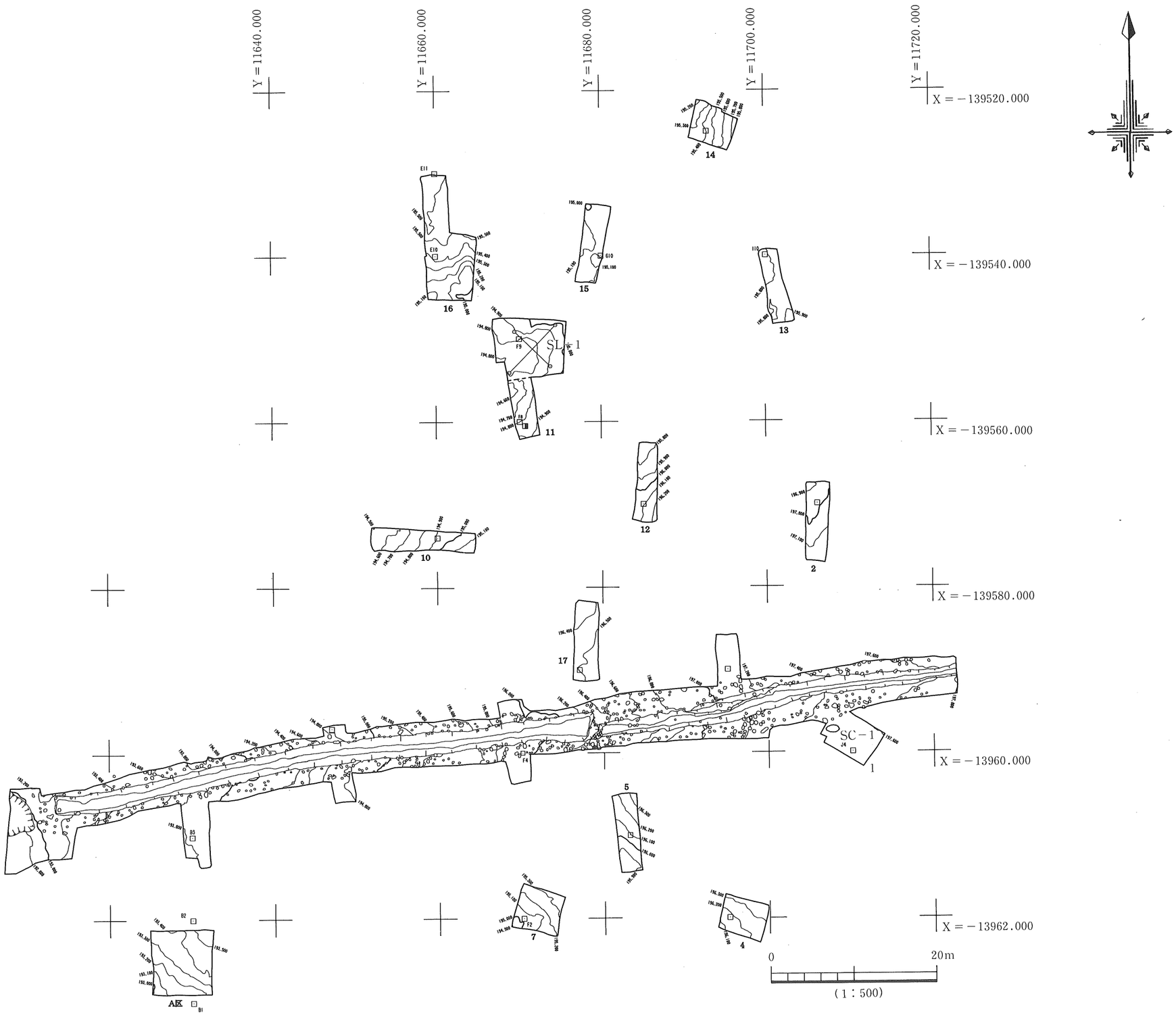
第２節　層序

諏訪廻第１遺跡の基本層序は第３図の通りであるが、A区・B区共通の基本土層であり、遺物包含層は第２・３層で、遺構検出面は第６層御池降下軽石（御池ボラ）層上面である。



第３図　基本土層図（A区南壁）

１：褐灰色土　　表土及び耕作土。
２：黒色土　　文明白ボラをわずかに含む。
３：黒褐色土　　御池ボラをわずかに含む。２層を中心として２・３層が遺物包含層である。
４：黒褐色土　　３層より多く御池ボラを含み、やや硬質。(10YR２／２～２／３)
５：暗褐色土　　４層より多く御池ボラを含む。(10YR３／３)
６：御池ボラ
７：黒色粘質土　やや柔らかい。(10YR1.7／１)
８：黄褐色土　　２次アカホヤ層。
９：黄褐色土　　プライマリーなアカホヤ火山灰層である。
10：黄褐色土　　９層と同じ。
11：黄褐色土　　アカホヤ層。直径数mmの軽石粒の層。
12：黒色土　　ローム層で、硬質。
13：黒褐色土　　12層よりやや柔らかく、白・黄・橙色の微小なパミスを含む。(10YR３／１)
14：暗褐色土　　白・黄・橙色の微小なパミスを含み、柔らかい。(10YR３／３)
15：暗褐色土　　14層とほぼ同層であるが、パミスを含まずやや粘性。(10YR３／３)



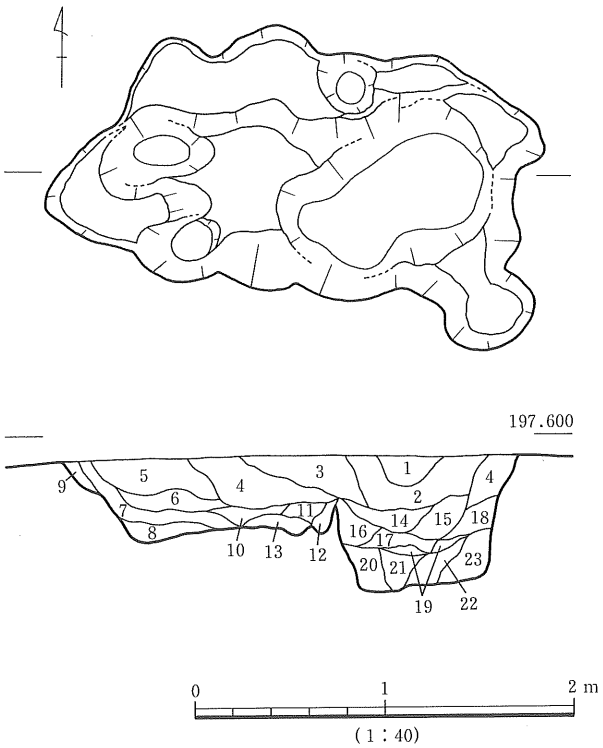
第４図　調査区地形図及び遺構分布図

第３節　Ｂ区の調査

Ｂ区は町営墓地公園のうち調査対象を墓域部分（6,160㎡）とし、調査期間等の制約上、墓域の面積の約10%程度の詳細な確認調査を行った。任意に17ケ所のトレンチを設定したが、顕著な遺構・遺物のみを抽出し以下に示していく。

１　トレンチ１検出の土坑（SC－１、第５図）

トレンチ１は調査区の東側、中央の溝状遺構（SE－１）の南側に位置する。６層上面で土坑１基を検出した。土坑は長軸２m50cm～60cm、深さ50cm～75cmの不定楕円形を呈す。遺物は出土せず時期は不明で、用途についても不明である。



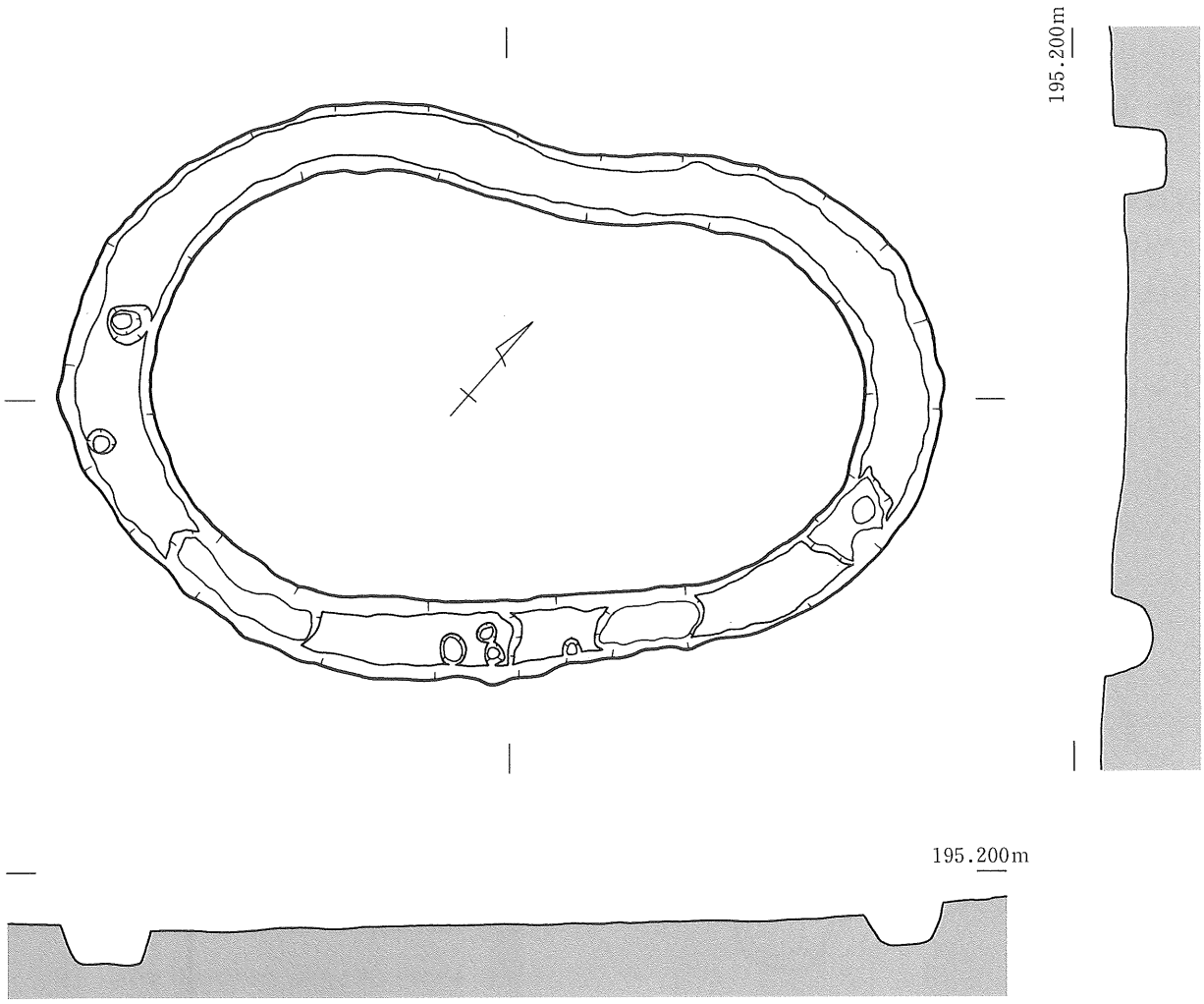
第５図　SC－１実測図

SC－１　埋土土層注記

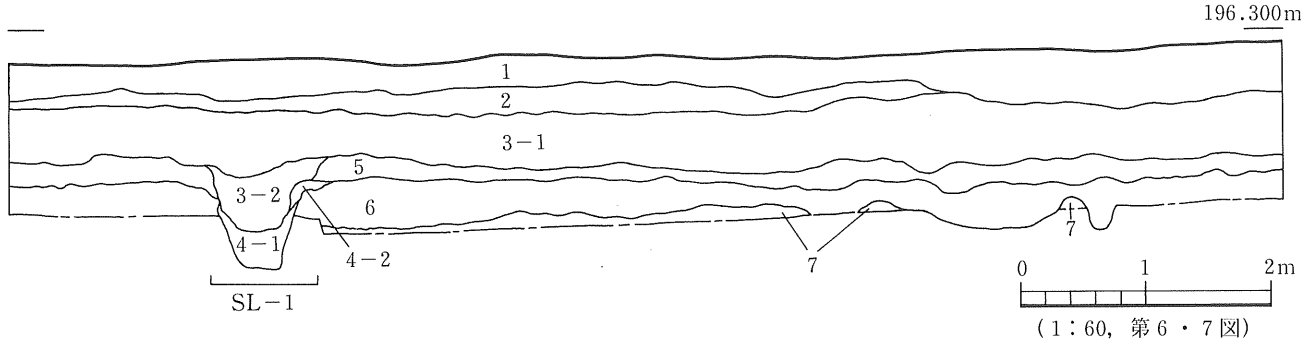
1　黒褐色土　御池ボラを多く含む。直径１cm大のもの混在。10YR２／３
2　黒褐色土　微小な御池ボラを多く含む。10YR２／２
3　暗褐色土　御池ボラを多く含む。10YR３／３
4　暗褐色土　３層より多く御池ボラを含む。10YR３／４
5　黒褐色土　御池ボラをわずかに含む。10YR３／１
6　黒褐色土　５層より多く御池ボラを含む。10YR３／１
7　暗褐色土　６層より多く御池ボラを含む。やや硬質。10YR３／３
8　黒褐色土　御池ボラを含み、やや柔らかい。10YR２／２
9　御池ボラ崩れ込み
10　暗褐色土　直径１cm大のボラ粒が点在し、やや粘性有り。7.5YR３／４
11　黒褐色土　御池ボラを多く含み、やや柔らかい。10YR３／２
12　暗褐色土　11層より多く御池ボラを含む。10YR３／３
13　暗褐色土　御池ボラを多くを含み、やや硬質である。10YR３／３
14　黒褐色土　２層より多く微小な御池ボラを含む。10YR２／３
15　黒褐色土　14層に対し御池ボラの含有量は少ない。10YR２／２
16　暗褐色土　御池ボラを多く含み、ほぼ12層と同じ。10YR３／３
17　暗褐色土　直径1.5cm大のボラ粒を多くを含む。10YR３／４
18　暗褐色土　御池ボラを多くを含むが、４層よりボラの含有量は少ない。10YR３／４
19　御池ボラ
20　暗褐色土　16・17層より多くの御池ボラを含み、直径２cm大のボラ粒が点在する。10YR３／３
21　黒褐色土　御池ボラを多く含む。（20層よりやや少ない）ややもろい。10YR２／２
22　暗褐色土　御池ボラを多く含み、20層より硬質である。10YR３／４

２　トレンチ11検出の周溝状遺構（SL－１、第６図）

トレンチ11は調査区の北より部分に位置し、５層上面で検出された。埋土が柔らかい黒色土であったため、５層（暗褐色土）での検出が行えた。SL－１は、長軸７m50cm、短軸４m～４m50cmの不定楕円形プランで、周溝は、幅50cm～70cmで深さは30cm～40cmである。遺物は皆無で、時期不明である。溝の中に７点程柱穴がみられるが、周溝状遺構に伴うものとは考えにくい。土層断面図についてはトレンチ11の東壁を掲載した。土層断面図を見る限りではSL－１は４層上面或いは３層中から掘り込まれていると思われる。トレンチ11付近は御池ボラ上面の地形測量では窪地になっており茶畑の影響を受けず良好な残存状態であった。用途については不明である。

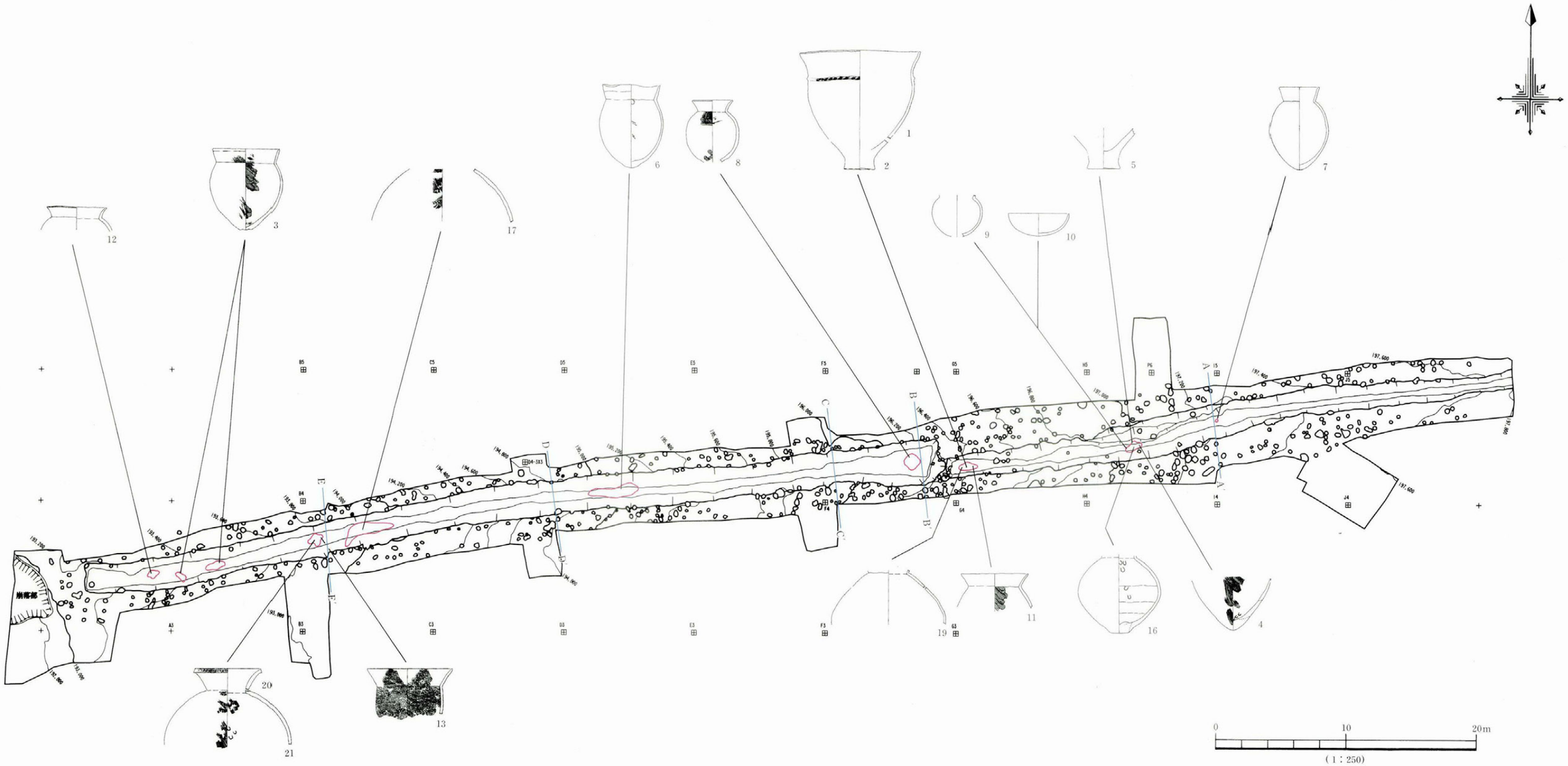


第６図　SL－１　実測図

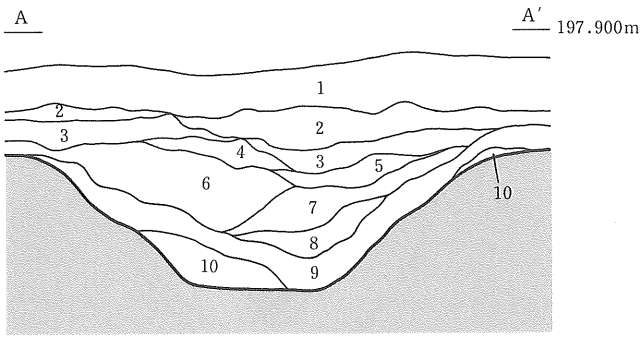


第７図　トレンチ11東壁土層断面図

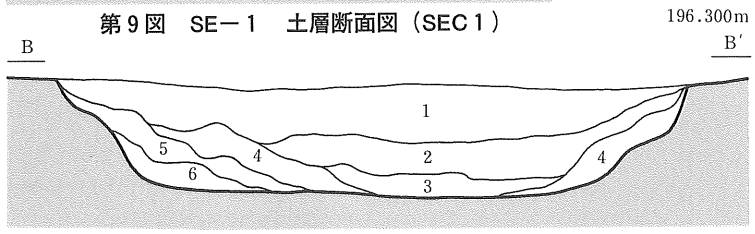
1　　表土
2　　褐灰色土　文明白ボラ及び白ボラブロックを含む。
3－1　黒色土　　文明白ボラ及び御池ボラをわずかに含む。
3－2　黒色土　　御池ボラをわずかに含み、３－１層よりややしまっている。
4－1　暗褐色土　３－１層より多く御池ボラを含む。
4－2　暗褐色土　御池ボラを多く含み、柔らかい。
5　　暗褐色土　４－１層より多く御池ボラを含み、やや硬質。
6　　黒褐色土　３－２層より多く御池ボラを含み、ややしまっている。
7　　御池ボラ



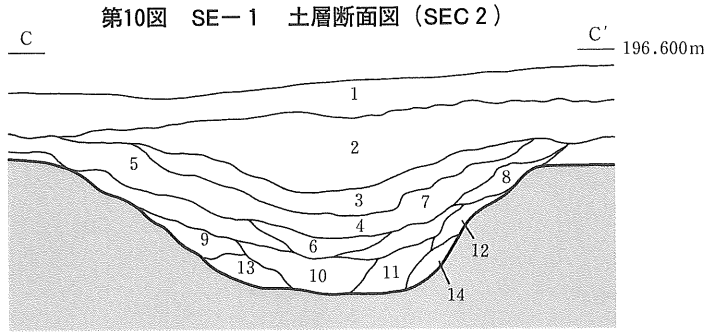
第8図　ＳＥ－１及び遺物分布



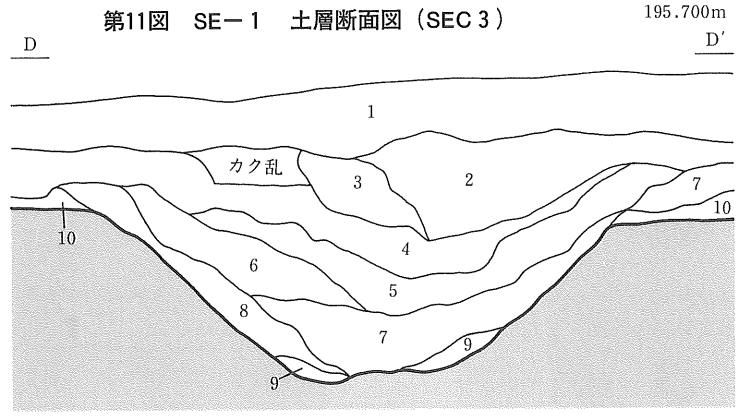
第９図　SE－１　土層断面図（SEC１）



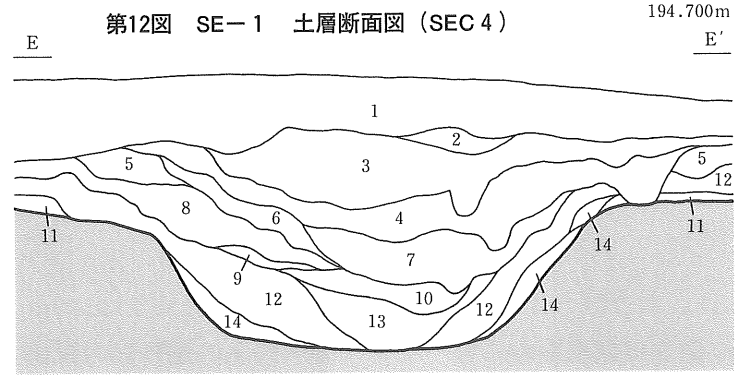
第10図　SE－１　土層断面図（SEC２）



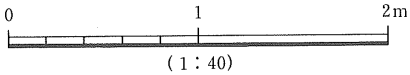
第11図　SE－１　土層断面図（SEC３）



第12図　SE－１　土層断面図（SEC４）



第13図　SE－１　土層断面図（SEC５）



（１：40）

第９図　土層断面図注記

1　表土
2　黒色土　　文明白ボラをわずかに含む。
3　黒色土　　御池ボラを含む。
4　黒色土　　３層より多く御池ボラを含み、硬質。
5　黒褐色土　微小な御池ボラを多く含む。
6　黒褐色土　４・５層より多く御池ボラを含む。
7　黒褐色土　６層に対しやや御池ボラ含有量は少ない。
8　黒褐色土　７層より多くの微小な御池ボラを含み、直径１cm前後のボラが点在している。
9　暗褐色土　最も多く御池ボラを含み、硬質。
10　にぶい黄褐色土　御池ボラの崩れ込みと思われる。

第10図　土層断面図注記

1　黒褐色土　御池ボラを多く含む。
2　黒褐色土　１層より多く御池ボラを含む。Ｂ－Ｂ′付近では２層から遺物は出土。
3　黒褐色土　微小な御池ボラを多く含む。やや硬質。
4　暗褐色土　２・３層より多く御池ボラを含む。
5　暗褐色土　４層より多く御池ボラを含み、硬質。
6　暗褐色土　黒色粘質ブロック、御池ボラ等が混在し、崩れ込みと思われる。

第11図　土層断面図注記

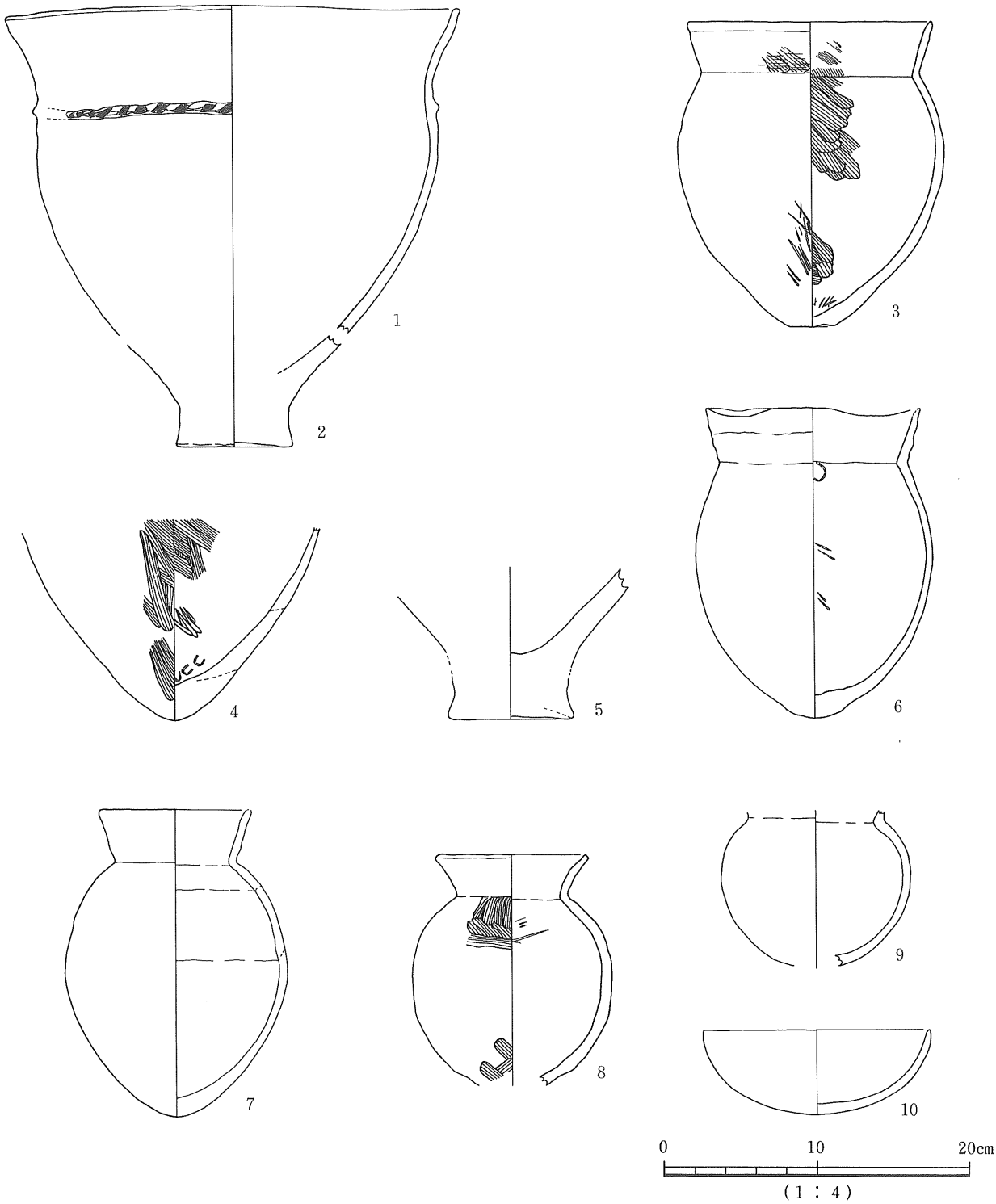
1　表土
2　黒色土　　文明白ボラをわずかに含む。
3　黒色土　　御池ボラを含む。
4　黒褐色土　微小な御池ボラを多く含む。Ｃ－Ｃ′付近では４層から遺物出土。
5　黒褐色土　４層より多くの御池ボラを含む。
6　黒褐色土　微小な御池ボラを多く含む。５・７層に比べ色調が濃い。やや軟質。
7　黒褐色土　４・６層より多くの御池ボラを含む。
8　暗褐色土　御池ボラを多く含み、やや軟質。
9　暗褐色土　御池ボラを多く含み、やや硬質。
10　暗褐色土　５・６・７層より多く御池ボラを含み、やや硬質。
11　暗褐色土　御池ボラを最も多く含み、硬質。
12　暗褐色土　御池ボラを多く含み、８層よりやや硬質。
13　暗褐色土　11層とほぼ同層。
14　御池ボラ崩れ込み。

第12図　土層断面図注記

1　表土
2　黒色土　　文明白ボラをわずかに含む。
3　黒色土　　御池ボラをわずかに含む。
4　黒色土　　御池ボラを含む。
5　黒褐色土　微小な御池ボラを含む。
6　黒褐色土　４・５層より多く御池ボラを含む。
7　暗褐色土　御池ボラを多く含み、やや硬質。
8　暗褐色土　７層より多く御池ボラを含み、硬質。
9　御池ボラ崩れ込み。
10　御池ボラ

第13図　土層断面図注記

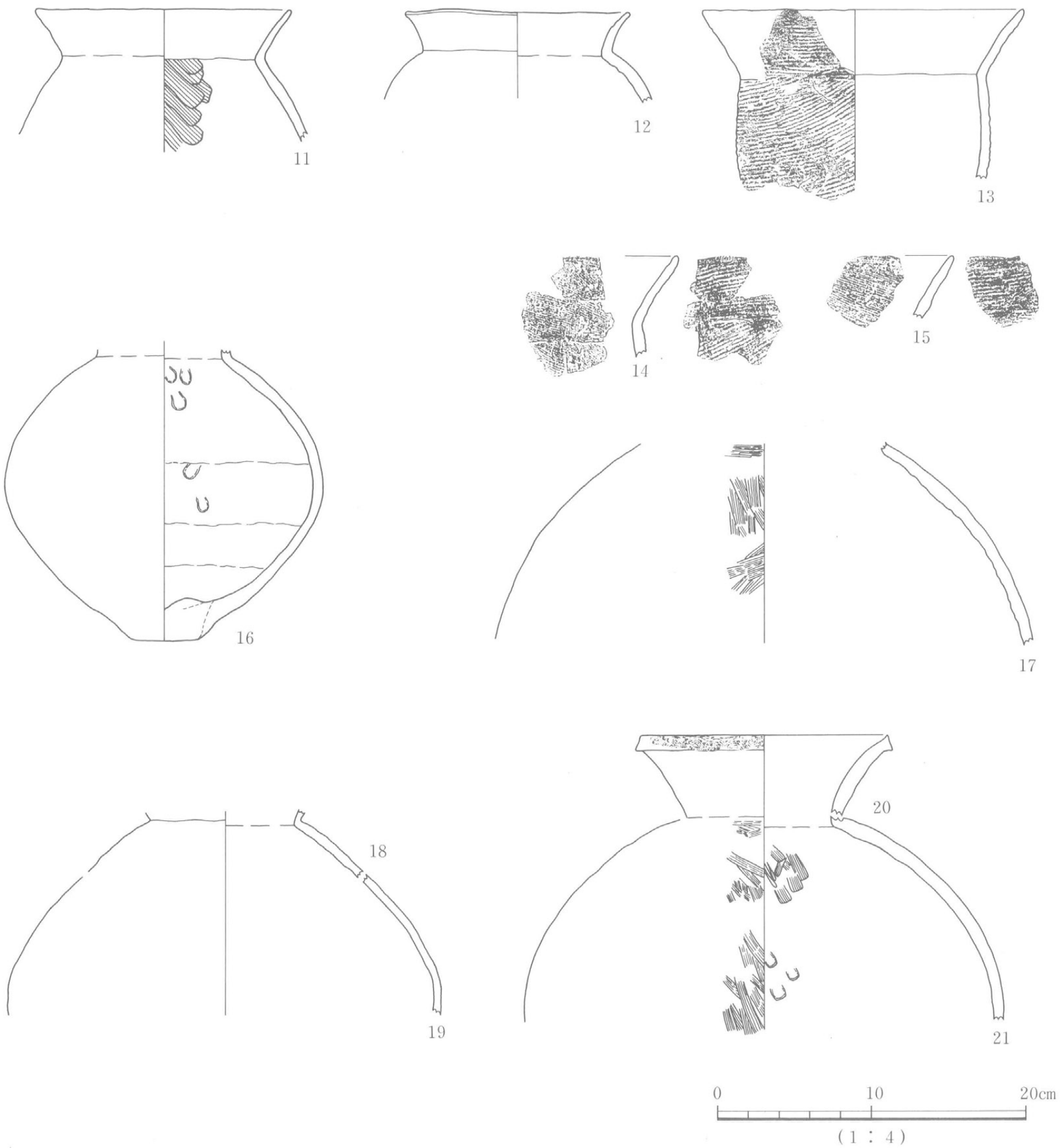
1　表土
2　黒色土　　文明白ボラをわずかに含む。
3　黒色土　　御池ボラをわずかに含み、サラサラとした感触である。
4　黒褐色土　御池ボラを含む。
5　黒褐色土　御池ボラを４層に比べ少量含む。
6　黒褐色土　４・５層より多く御池ボラを含む。
7　黒褐色土　御池ボラを多く含み、４・６層より色調が濃い。
8　黒褐色土　御池ボラを多く含み、直径１cm前後のボラが点在している。
9　暗褐色土　御池ボラを多く含み、柔らかくもろい。
10　暗褐色土　微小な御池ボラを多く含む。
11　御池ボラ
12　暗褐色土　御池ボラを最も多く含み、硬質。
13　暗褐色土　12層より御池ボラの含有量は少なく柔らかいが、やや色調は濃い。
14　御池ボラ崩れ込み。



第14図　SE－1　出土土器　古墳時代（前期）

3　溝状遺構（SE－1、第8図）

今回の調査で検出した溝状遺構（SE－1）は、調査区のほぼ中央に位置し確認できた長さは140m～150mで、平均的な幅が2m40cm～2m60cm、深さは検出面から測って約60cm～90cmの逆台形の断面形態を呈する溝である。溝は、東西方向に走っており溝底レベルは西に向け下り、西側においては端部が検出されたが、東側においては舗装道路下に延びていたため端部の確認は行えなかった。遺物の多くは床面から10～20cm浮いた状態で出土した。1～10（第14図）は古墳時代前半、11～21（第15図）は弥生時代後半に比定されると思われる。



第15図　SE－1　出土土器　弥生時代（後期）

1～6は甕である。1は頸部に刻み目貼付突帯を有し、刻み内に布目圧痕が認められる。頸部に稜を持たず、口縁は緩やかに外反する。器面調整は、外面は工具による横･斜め方向のナデとナデ調整、内面は丁寧な横ナデである。口縁端部は指あるいは布で横ナデされ、やや凹線状にくぼむ。外器面には煤が付着している。2は接点は見られないものの1の底部と思われ、明瞭なくびれは持たないが裾部は若干外に開く。いわゆる充実した脚台で、ドーナツ状の粘土紐を貼り付け円盤状の粘土盤を中に充填していく製法をとると思われる。底部外面は平底ではあるが、押圧により若干凹んでおり、ナデ調整が見られる。器面調整は、外面は工具による横・斜め方向の丁寧なナデで、一部指頭圧痕が見られる。内面はナデ調整である。3は口縁から底部で、屈曲する頸部に稜が見られ胴部が少し張り口縁

部がくの字に外反するもので、胴部最大径が口径をやや上回る。底部は径の小さな平底でケズリ痕が見られる。器面調整は外面は工具による丁寧な横ナデの後、頸部から口縁方向に斜めにハケ状工具で掻き上げ仕上げており、頸部から胴部にかけては工具による丁寧な横ナデで、底部から胴部へ縦・斜め方向のケズリ痕が見られる。内面は横・斜め方向のハケ目調整の後ナデ調整を施しており、頸部から胴部にかけては斜め方向のハケ目調整で、胴部から底部にかけてはケズリ・ハケ目調整の後ナデ調整を施している。外器面には煤が付着している。4は尖底気味の丸底で器面調整は外面は縦・斜め方向のハケ目調整、内面は斜め方向のハケ目調整の後部分的にナデ調整が見られる。底部内面には一部指頭圧痕が見られる。5は平底で底部にくびれを持ち、裾部が若干外に開く。ドーナツ状の粘土紐を貼り付け粘土板を充填していくのは2と同様である。器面調整は外面は丁寧なナデ・横ナデで裾部ではつまみ出すような指頭圧痕が見られ裾端部は丸く仕上げている。内面は工具による丁寧なナデ調整である。5は口縁から底部で屈曲する頸部に稜が見られ胴部が少し張り口縁部がくの字に外反するもので、胴部最大径が口径をやや上回る。波状口縁として図示したが剥離が著しく、平口縁の可能性も否めない。口縁部には1本の明瞭な粘土の輪積み痕を残す。底部は丸みをおびた径の小さな平底で若干のくびれを持つが、裾部は広がらない。器面調整は外面は丁寧なナデ、内面は一部ケズリ痕は見られるものの丁寧なナデ調整である。外器面には煤が付着している。

7～9は壺である。7は完形で、口縁部の外反が少なく胴部は張り気味で最大径を胴部中位に持ち底部は尖底気味の丸底である。器面調整は外面は口縁部では板状工具による丁寧な横ナデ、頸部以下では板状工具による縦・斜め方向のナデ、ミガキ調整が見られる。内面は口縁部では板状工具による丁寧な横ナデ、頸部以下では縦・斜め方向のハケ目調整後丁寧なナデ・横ナデが見られ、粘土の輪積み痕を残す。8は口縁から胴部で胴部中位に最大径が見られ、球形胴に外反する口縁部を持ち、頸部に稜を持つ。器面調整は外面は口縁部では工具による丁寧な横ナデ・ナデ、胴部上位から頸部に向けて縦方向のハケ目調整を施し頸部で斜めに強く掻き上げている。胴部では工具による横ナデ、斜め方向のハケ目調整である。部分的に黒塗りの跡が見られ、供献用に使用されたものと思われる。内面は口縁部ではハケ状工具による横ナデ、胴部では工具によるナデ調整である。9は頸部から底部で口縁は外反気味に短く立ち上がると思われ、底部は丸底と思われる小型丸底壺である。器面調整は外面は工具による横ナデの後ミガキ調整が施されている。内面は横ナデ・ナデである。

10は杯である。丸底を呈し外器面には丹塗りが見られる。器面調整は外面は工具による横ナデの後丁寧なミガキ。内面は横ナデ・ナデである。

11～15は甕である。11は口縁から胴部で屈曲する頸部に稜が見られ、胴部最大径が口径を上回るものである。器面調整は外面は一部縦方向のハケ目が見られるが、ナデ調整が施されている。内面は口縁部では横ナデ、頸部から胴部にかけては斜め方向のハケ目調整である。12は口縁から胴部で屈曲する頸部に稜が見られる。口縁は外反し先細りに仕上げる。器面調整は外面は工具による横ナデ、ナデで、内面は口縁部では工具による横ナデ、頸部では一部ヘラ状工具による粗いカキアゲが見られるがナデ調整を施している。13～15は接点は見られないものの同一個体と思われる。頸部に稜を有し外反する口縁を持ち口径は胴部最大径を上回る。器面調整は外面は口縁部に横方向にタタキを施し、胴部には斜め方向にタタキを施す。一部タタキ後にナデが施されている。内面は斜め方向のハケ目調整で口縁端部のみ横方向の工具によるナデが施されている。外器面には煤が付着している。

16～21は壺である。16は頸部から底部で、球形の胴部に直立する短い口縁を持つと思われる。底部はやや厚みのある突出した平底である。器面調整は外面は工具による丁寧なナデ調整、内面は工具によ

るナデ調整で一部指頭圧痕が見られ、粘土の輪積み痕を残す。17は扁球形の胴部を呈するものと思われる。器面調整は縦・斜め方向のハケ目調整後、丁寧な横ナデ、ナデを施している。内面は風化が著しいがナデ調整と思われる。18～19は接点は見られないものの同一固体と思われ、頸部から胴部で頸部に稜を持ち、扁球形の胴部を呈すると思われる。器面調整は内・外面ともにナデ調整である。胎土は粗く、直径2㎜～5㎜の白・青灰・褐・橙色の砂粒を多く含み在地色の強い土器である。20～21は接点は見られないものの同一個体と思われる。20は口縁部が二重口縁を呈し、口唇部に櫛描波状文を施すものである。器面調整は口縁部外面は横ナデ、頸部から胴部では縦・斜め方向のハケ目調整後丁寧な横ナデ・ナデ調整を施している。内面は口縁部では丁寧な横ナデ、胴部上位では一部原体の細い工具で掻き上げた後ナデ調整、胴部中位では斜め方向のハケ状工具による調整後ナデ・横ナデを施している。

第1表　諏訪廻第1遺跡出土器観察表(1)

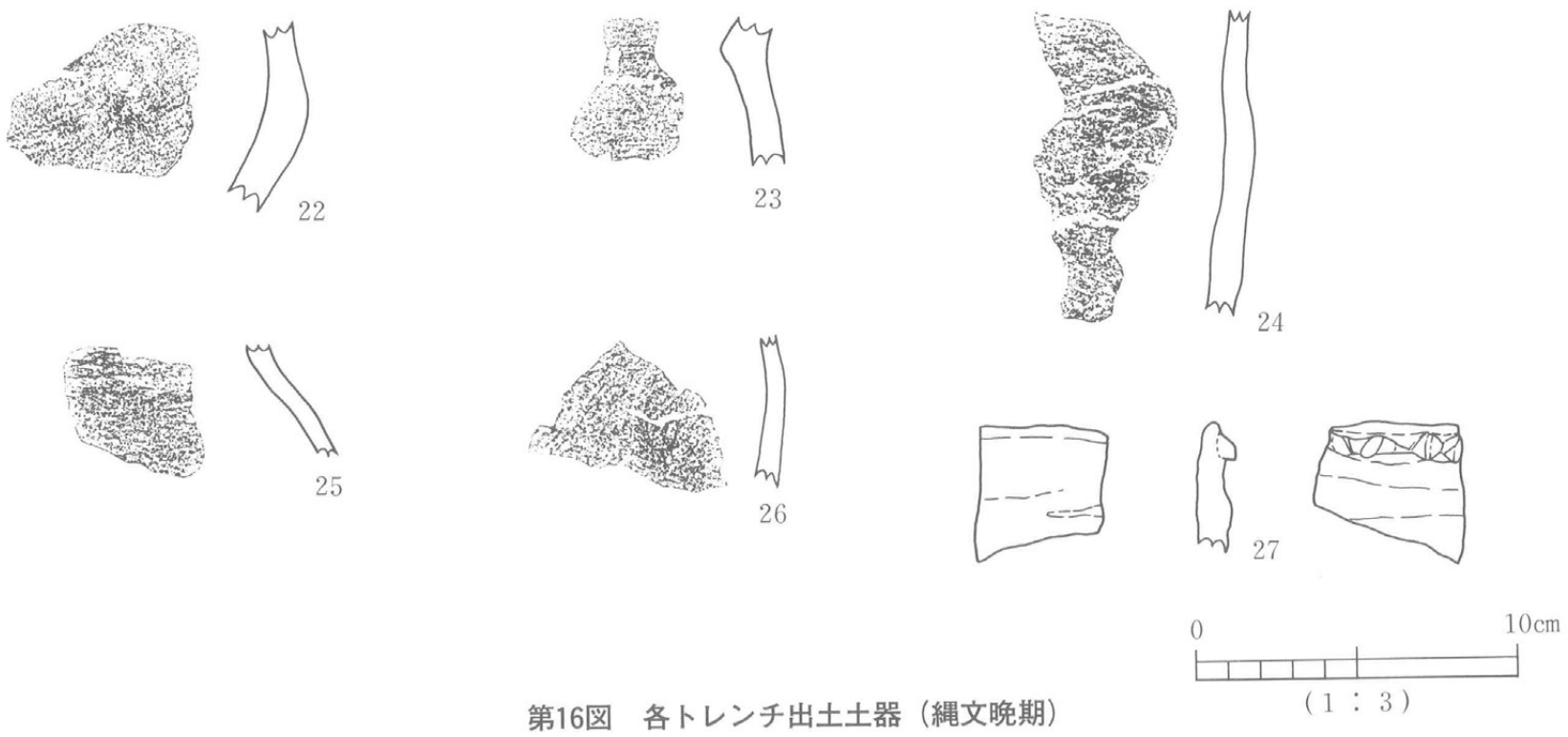
挿図番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			手法・調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	土師器	カメ 口縁～ 胴部	SE －1	29.6	－	－	刻み目突帯、スス付着 横ナデ、ナデ 斜方向の工具ナデ	工具による横ナデ	褐灰色 橙色	にぶい 橙色	1～2㎜の灰・茶・白・黒・橙色の砂粒	外面にスス付着
2	土師器	カメ 底部	SE －1	－	7.4	－	工具によるナデ 横ナデ	ナデ	浅黄色	黒褐色	1～2㎜の灰・橙・赤・白色の砂粒	
3	土師器	カメ 口縁～ 底部	SE －1	16.0	2.9	19.8	ハケ目、工具による横ナデ ケズリ	ハケ目、工具による横ナデ ナデ、ケズリ	明赤褐色	にぶい 赤褐色	1㎜以下の橙・白・透明光沢粒	外面にスス付着
4	土師器	カメ 胴部～ 底部	SE －1	－	－	－	縦・斜め方向のハケ目	斜め方向のハケ目 指頭圧痕	にぶい 橙色 橙色	明赤褐色 橙色	2㎜前後の橙色砂粒 1㎜以下の白・青灰・橙・透明光沢粒	
5	土師器	カメ 底部	SE －1	－	7.8	－	ナデ、横ナデ	工具によるナデ	にぶい 黄橙色	褐灰色 暗褐色	1㎜前後の白・黒・灰・透明光沢粒	
6	土師器	カメ 口縁～ 底部	SE －1	14.0	3.0	20.1	ナデ 粘土の継ぎ目	ナデ、ケズリ	橙色 褐灰色	灰白 褐灰	1㎜以下の白色微細粒	外面にスス付着、内面斑点状の赤色顔料？
7	土師器	ツボ 完形	SE －1	9.2	－	20.0	ナデ、横ナデ ミガキ	縦・斜め方向のハケ目 ナデ、横ナデ	明黄褐色 にぶい 黄橙色	褐灰色	0.5㎜以下の黒・透明光沢微細粒	
8	土師器	ツボ 口縁～ 胴部	SE －1	9.6	－	－	ナデ、横ナデ 工具による横ナデ ハケ目	工具によるナデ、横ナデ	黒色 明赤褐色	明赤褐色 橙色	4㎜以下の白・灰・青灰・茶の砂粒	外面黒塗り
9	土師器	ツボ 頸部～ 胴部	SE －1	－	－	－	工具による横ナデ・ナデ ミガキ	横ナデ，ナデ	橙色	明褐色	2㎜以下の灰・黒・白の砂粒 4㎜以下の白・茶の砂粒	外面丹塗り
10	土師器	杯 口縁～ 底部	SE －1	15.0	－	5.5	工具による横ナデ・ナデ ミガキ	横ナデ，ナデ	明赤褐色	橙色	1㎜以下の黒・白・透明光沢粒	外面丹塗り
11	弥生	カメ 口縁～ 胴部	SE －1	16.4	－	－	ハケ目、ナデ	横ナデ ハケ目	橙色	橙色	1㎜以下の黒・白・透明光沢粒	
12	弥生	カメ 口縁～ 胴部	SE －1	14.4	－	－	ナデ、横ナデ	横ナデ 指頭圧痕	橙色 にぶい 赤褐色	橙色	3㎜の白色砂粒 1㎜以下の白・灰・橙色の砂粒	
13	弥生	カメ 口縁～ 胴部	SE －1	21.6	－	－	横、斜め方向のタタキ ナデ	横ナデ 斜め方向のハケ目	黒色 にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	4㎜前後の灰・白・茶の砂粒 1～2㎜の黒・灰・白の砂粒	外面にスス付着
14	弥生	カメ 口縁	SE －1	－	－	－	横、斜め方向のタタキ ナデ	横ナデ 斜め方向のハケ目	黒色 にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	4㎜前後の灰・白・茶の砂粒 1～2㎜の黒・灰・白の砂粒	13と同一固体か
15	弥生	カメ 口縁	SE －1	－	－	－	横、斜め方向のタタキ ナデ	横ナデ 斜め方向のハケ目	黒色 にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	4㎜前後の灰・白・茶の砂粒 1～2㎜の黒・灰・白の砂粒	13と同一固体か
16	弥生	ツボ 頸部～ 底部	SE －1	－	4.6	－	工具によるナデ	工具によるナデ 指頭圧痕	橙色	にぶい 黄橙色	2～3㎜の橙色砂粒 1㎜以下の黒・橙色の微細粒	
17	弥生	ツボ 頸部～ 胴部	SE －1	－	－	－	縦・斜め方向のハケ目 ナデ、横ナデ	風化著しい ナデ	黄灰色 明黄褐色	にぶい 黄橙色	5㎜の赤色砂粒 1～3㎜の橙・茶・白・灰・透明光沢粒	
18	弥生	ツボ 頸部～ 胴部	SE －1	－	－	－	ナデ	ナデ	明黄褐色	黄橙色	2～5㎜の白・青灰・褐・橙色の砂粒	
19	弥生	ツボ 胴部	SE －1	－	－	－	ナデ	ナデ	明黄褐色	黄橙色	2～5㎜の白・青灰・褐・橙色の砂粒	
20	弥生	ツボ 口縁	SE －1	16.1	－	－	横ナデ	ナデ、横ナデ	黄橙色	橙色	1～2㎜の橙・灰・白色の砂粒	二重口縁 櫛描波状文
21	弥生	ツボ 頸部～ 胴部	SE －1	－	－	－	ハケ目 ナデ・横ナデ	ハケ目 ナデ、横ナデ	にぶい 黄橙色	灰白色 褐灰色	1～2㎜の橙・灰・白色の砂粒	

4　縄文時代の遺物（第16・17図）

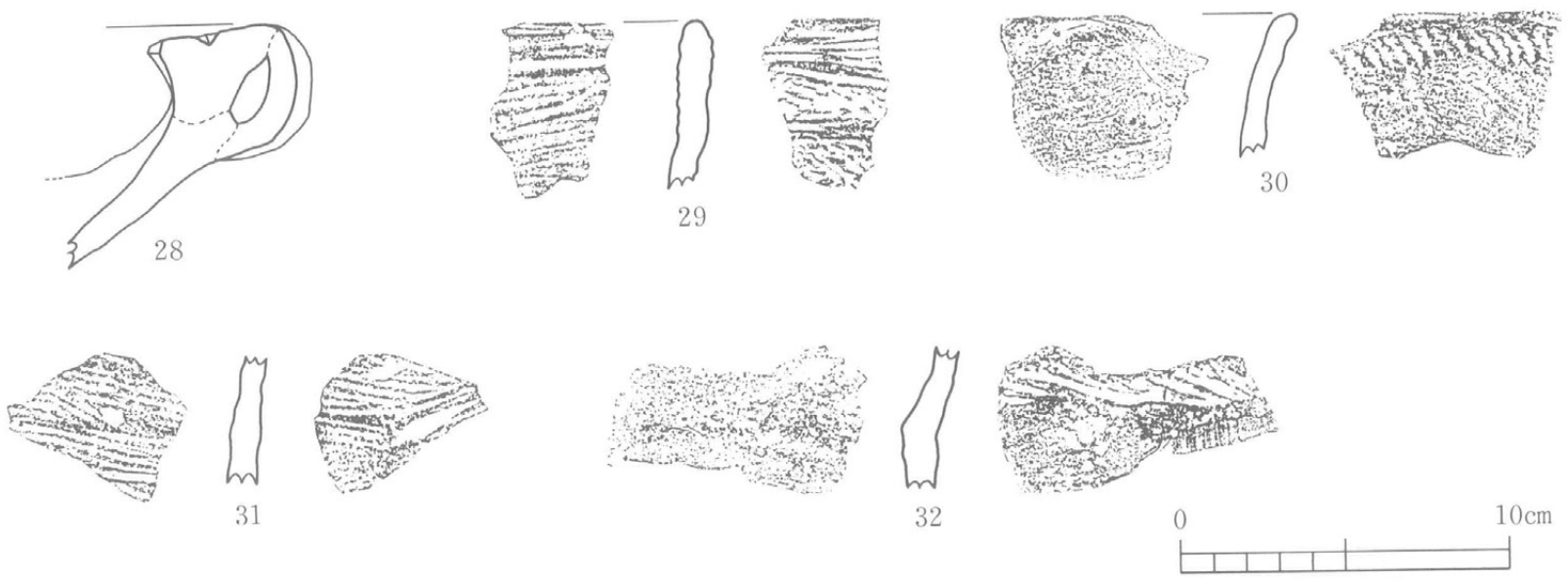
遺物はおおむね第２・３層から出土しているが、集中は見られない。各遺物は任意に設定したトレンチ内から出土したものである。遺構に伴うものは無く茶畑の影響により土器の移動が予想される。

22～27（第16図）は縄文時代晩期に比定される。22は鉢形土器の胴部で、内・外面ともに丁寧なナデ調整である。23は鉢形土器の肩部で内・外面ともに丁寧なナデ調整である。22・23は調査区中央から南よりのトレンチ４から出土しており胎土の類似性からも同一個体の可能性が高い。24は深鉢の胴部と思われ外面は丁寧なナデ調整で一部ミガキが見られるが煤の付着により観察できない。内面は工具によるナデ調整である。調査区南側のトレンチ７から出土している。25・26は鉢形土器と思われ丁寧なナデないしミガキが施されている。ともに調査区中央のトレンチ17から出土している。27は刻目突帯文土器で縄文時代晩期終末に比定されると思われる。口縁部突帯は口縁最上端からやや下がった位置にめぐらし、突帯上の刻みは指頭によるものと思われる。器面調整は内・外面ともに擦過痕を残すナデである。調査区中央から南西よりのトレンチ８から出土している。

28～32（第17図）は縄文時代後期に比定される市来系丸尾タイプの土器である。28は浅鉢形土器に脚台が付くもの（脚台付浅鉢）と思われる。波状口縁部の波頂部４ケ所に瘤状突起を配す。宮崎市平畑遺跡、田野町丸野第２遺跡などに類例が見られる。器面調整は工具によるナデ・横ナデである。29



第16図　各トレンチ出土土器（縄文晩期）



第17図　各トレンチ出土土器（縄文後期）

は深鉢の口縁部で実測図よりも外傾する可能性が高い。やや肥厚気味の口縁で外面に上下２段の貝殻腹縁連続刺突文を施文し、その２段の間の条痕調整には更にナデ調整が施されている。28・29は調査区中央から北よりのトレンチ11で出土している。30は深鉢の口縁部で１条の単純な連続刺突文を施している。器面調整は内・外面ともにナデ・横ナデである。30はトレンチ11に東隣のトレンチ12から出土している。31は鉢形土器の胴部と思われ内・外面ともに条痕調整が施されているが、外面はナデ調整が見られる。トレンチ11からの出土である。トレンチ11・12付近にやや縄文後期土器の分布が見られるが出土点数が少量のため考察できない。32は深鉢で頸部と思われるが確定できない。外面に斜めの沈線文を施文している。器面調整は内・外面ともにナデである。調査区中央から南側のトレンチ５から出土している。

第２表　諏訪廻第１遺跡出土土器観察表(2)

挿図番号	種別	器種	出土地点	手法・調整・文様		色調		土の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
22	縄文		トレンチ４	ナデ	ナデ	暗赤褐色 黒褐色	にぶい橙色	１㎜以下の白・黒・茶の砂粒 0.5㎜以下の白・透明光沢微細粒	
23	縄文		トレンチ４	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	１㎜以下の白・灰・透明光沢微細粒	
24	縄文		トレンチ７	ナデ ミガキ	工具によるナデ	黒褐色 黄褐色	にぶい黄橙色	１㎜以下の白・灰・透明光沢粒	
25	縄文		トレンチ17	ナデ ミガキ	ナデ	赤褐色	褐灰色	１㎜以下の白・黄色砂粒 0.5㎜以下の白・橙・透明光沢細粒	
26	縄文		トレンチ17	ナデ ミガキ	ナデ	暗褐色	暗褐色	１㎜以下の白・橙・透明光沢粒	
27	縄文		トレンチ８	刻目突帯 横ナデ	横ナデ	にぶい黄色	黄灰色	１㎜黒色砂粒 0.5㎜以下の黒・橙色の微細粒	
28	縄文		トレンチ11	ナデ、横ナデ	ナデ、横ナデ	にぶい赤褐色	明褐色	0.5㎜以下の白･透明光沢微細粒	脚台付浅鉢
29	縄文		トレンチ11	横方向の貝殻条痕 ２段の貝殻腹縁刺突文	横方向の貝殻条痕	黒褐色	にぶい赤褐色	１㎜以下の白・灰・透明光沢微細粒	
30	縄文		トレンチ12	横方向の貝殻刺突 ナデ、横ナデ	ナデ、横ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	１㎜以下の透明光沢細粒	
31	縄文		トレンチ11	横・斜め方向の貝殻条痕	横・斜め方向の貝殻条痕	暗赤褐色	赤褐色	0.5㎜以下の白･透明光沢微細粒	
32	縄文		トレンチ５	斜めの沈線文 ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	赤褐色	１㎜以下の白・灰・透明光沢微細粒	

第4章　小結

今回の発掘調査は、墓地公園の墓域部分(6,160㎡)の確認調査という範囲の限定されたものではあったが、結果的に合計1,210㎡という調査面積を得、おおよその遺跡の性格を捉えることができたと考えている。

遺構については溝状遺構、周溝状遺構、土坑、柱穴群等が検出されたが、残念ながらその時期・用途については不明な点が多い。調査区中央で検出された溝状遺構については、溝の底部において断片的には硬化面が確認できるものの道路跡とは考えにくく、水路或いは区画溝の可能性も考えられるが土層断面の観察では砂層の堆積は確認し得なかった。また、溝の周辺で検出された柱穴群についても柵列等を考慮し現場レベルでの確認を試みたが、狭小な調査区において認定には至らなかった。当遺跡の立地が丘陵上の台地平坦面で、調査対象地が中央溝により区切られた台地北部端に位置していることは生活空間の限られた北側よりも南側に遺跡本体が存在することが想定され、今後墓地公園の関連事業に伴った発掘調査が行われる際には今回の調査結果が生かされるであろう。

遺物については主に溝状遺構（SE－1）から出土しているが、流れ込みによるものと思われ一括資料としては扱えない。時期については弥生時代後半から古墳時代前半のものと思われる。甕は、頸部に稜を持たず緩やかに外反する口縁を持ち口径が最大径となるものと、頸部に稜を持ち胴部に最大径を持つものが見られる。第14図の1は、「いわゆる成川式土器」であるが現在の細分編年によれば東原式に相当すると思われる。しかし、その編年案は薩摩地方におけるものであり都城盆地における編年とは若干の隔たりが存在するであろうが、今後の参考として提示しておく。6は、在地色の濃い甕で外器面に炭化物の付着が見られるのに対し、内器面には斑点状に赤色顔料が認められ、転用の痕が見られ、時期については他の古墳初頭期より新しいものと思われる。

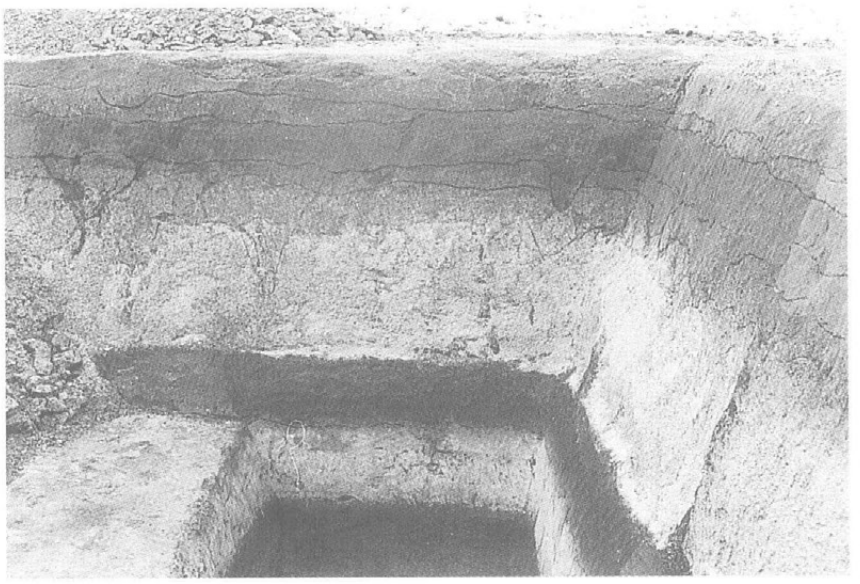
縄文時代の遺物については、遺構に伴うものは無く出土点数も少量のため今後の資料増加に期待したい。

最後になりましたが、発掘調査から整理段階に際しまして県文化課の谷口武範氏、東憲章氏、都城市文化課の桑畑光博氏の各氏から貴重な御教示・御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

（参考文献）
宮崎県教育委員会　1985「平畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集』
田野町教育委員会　1990「丸野第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第11集
都城市教育委員会　1994「黒土遺跡」『都城市文化財調査報告書』第28集
都城市教育委員会　1996「丸谷地区遺跡群」『都城市文化財調査報告書』第34集
三股町史編集委員会　1985「三股町史　改訂版」
石川悦雄　1984「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描－（Mk.Ⅱ）」『宮崎考古』第9号　宮崎考古学会
吉本正典　1995「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察－須恵器出現以前の資料を中心として－」『宮崎考古』第14号　宮崎考古学会
中村直子　1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号　鹿児島大学法文学部考古学研究室

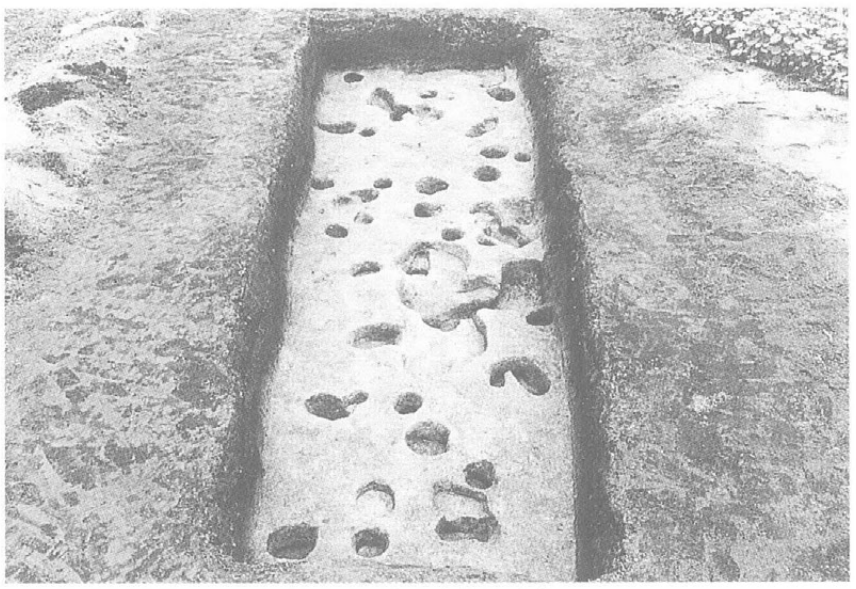
諏訪廻第１遺跡全景（垂直）

A区　完掘状況

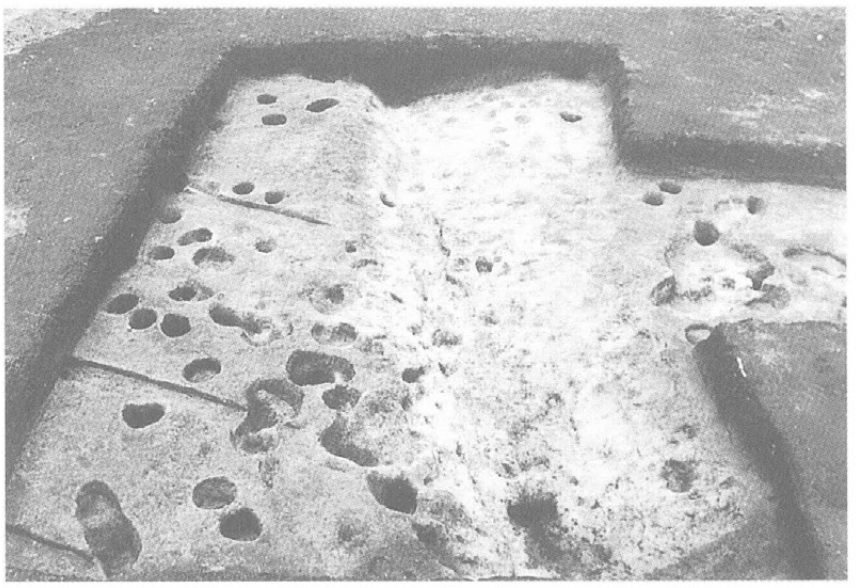


A区　土層断面（南壁）

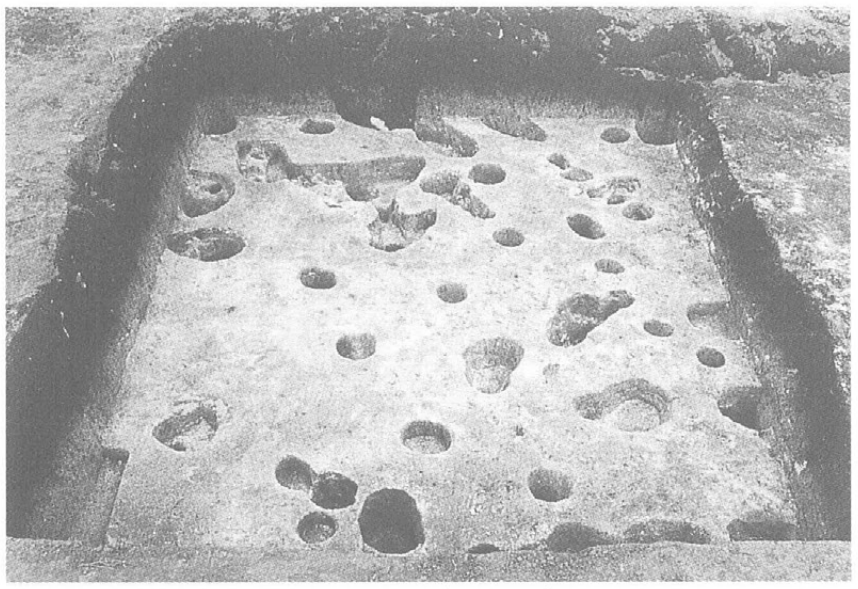
図版2



トレンチ2（南から）

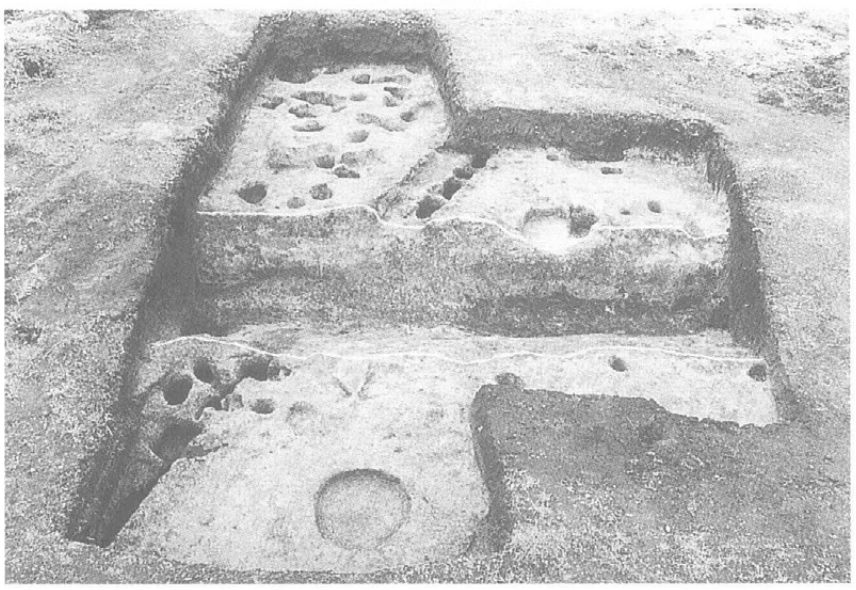


トレンチ3（東から）



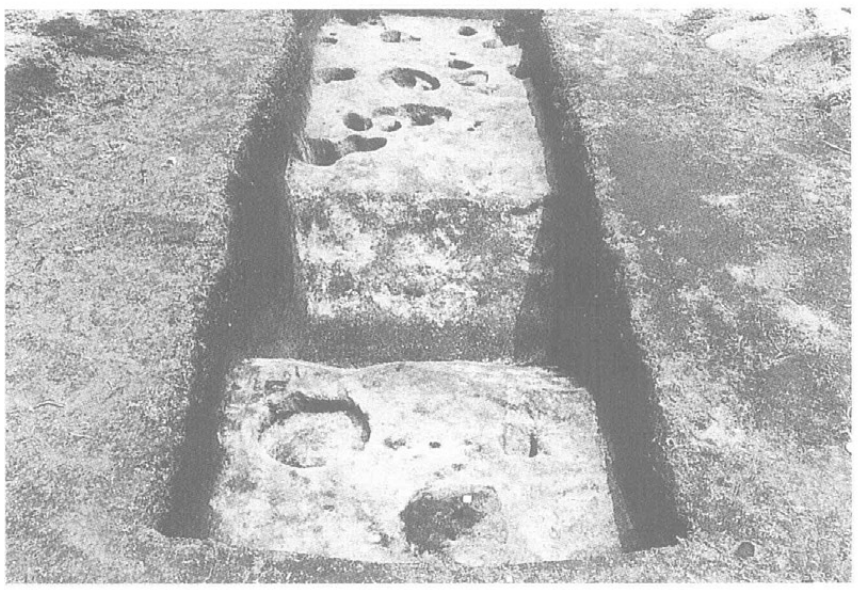
トレンチ4（西から）

トレンチ5（南から）

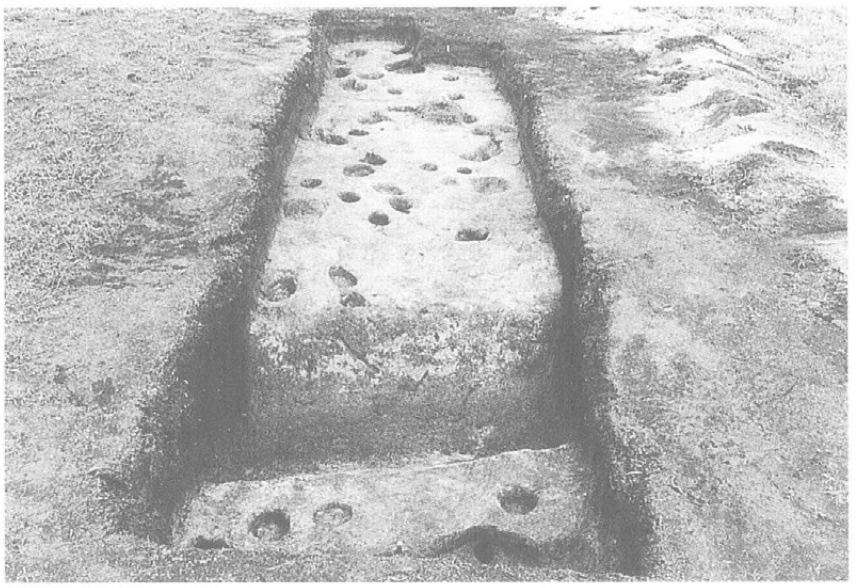


トレンチ6（北から）

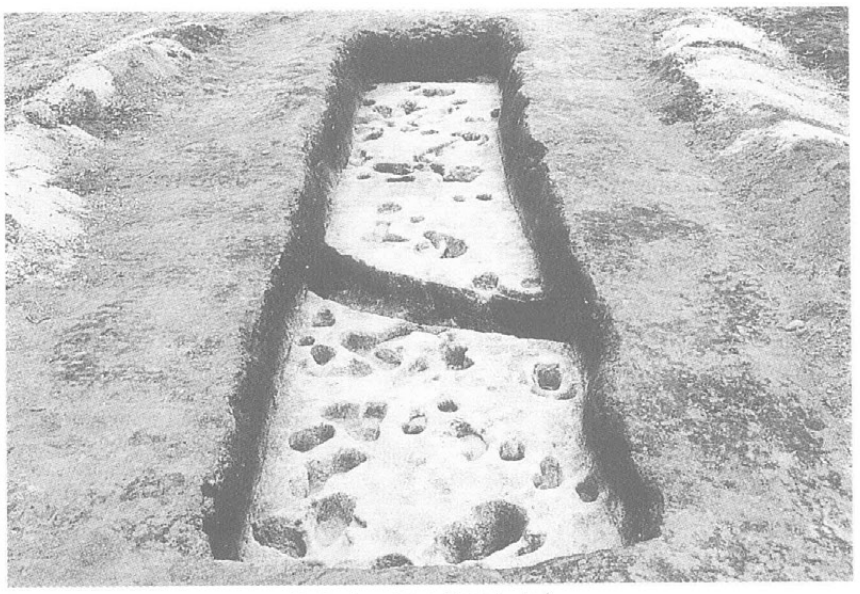
トレンチ7（南から）



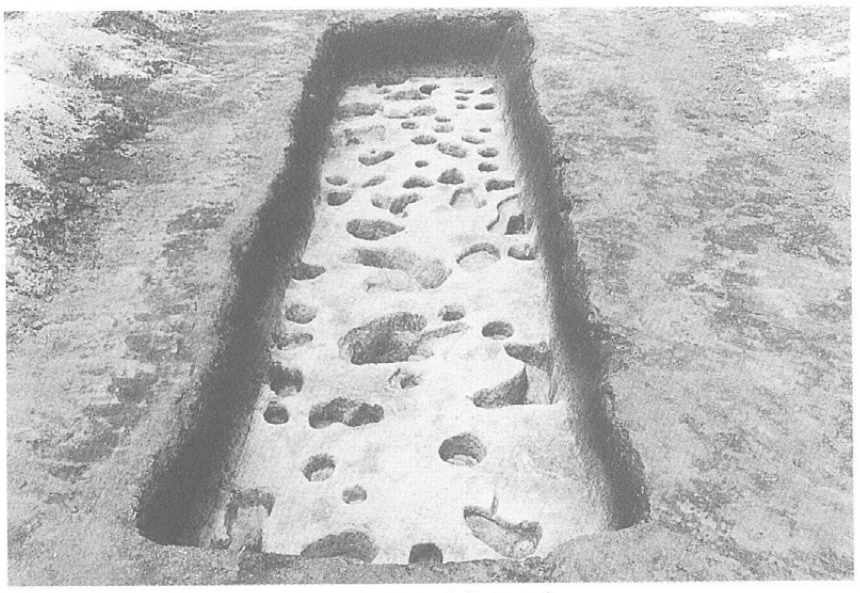
トレンチ8（北から）

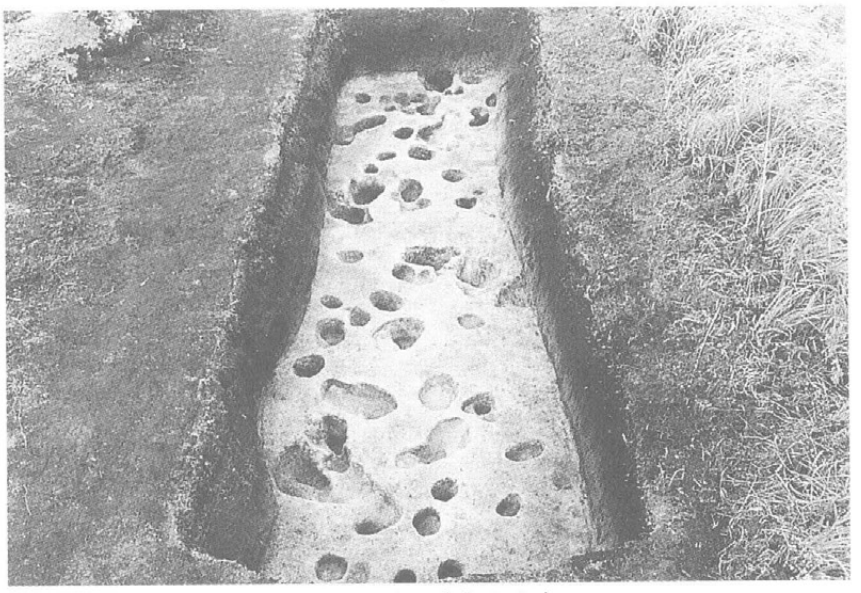


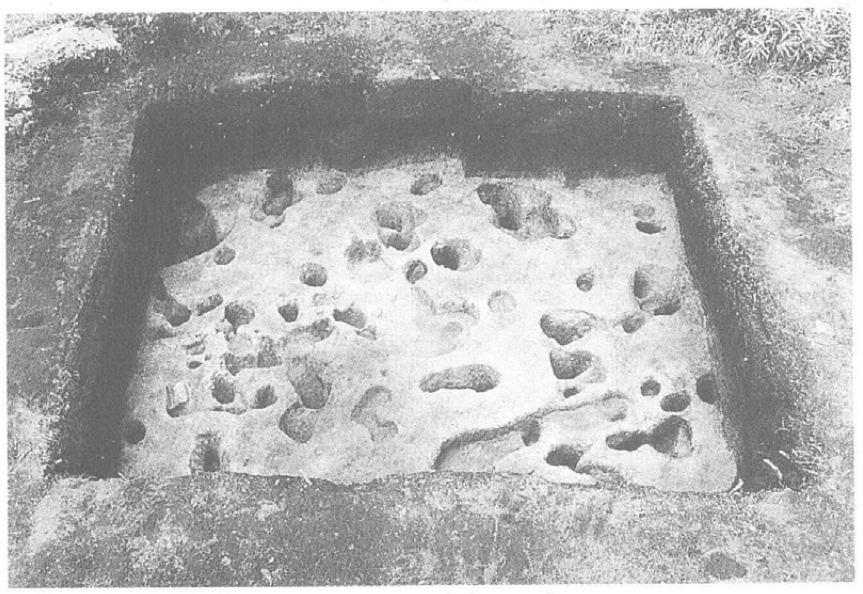
トレンチ9（北から）

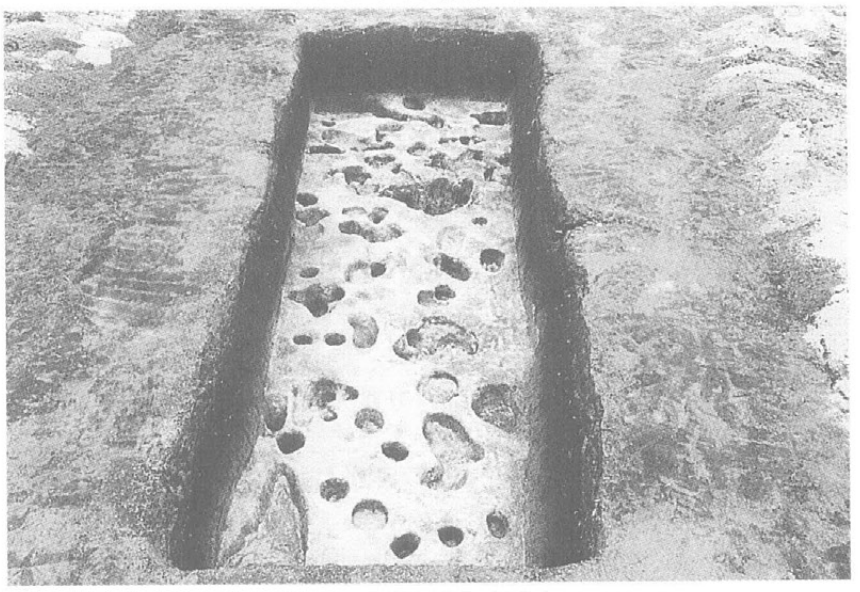

トレンチ10(西から)

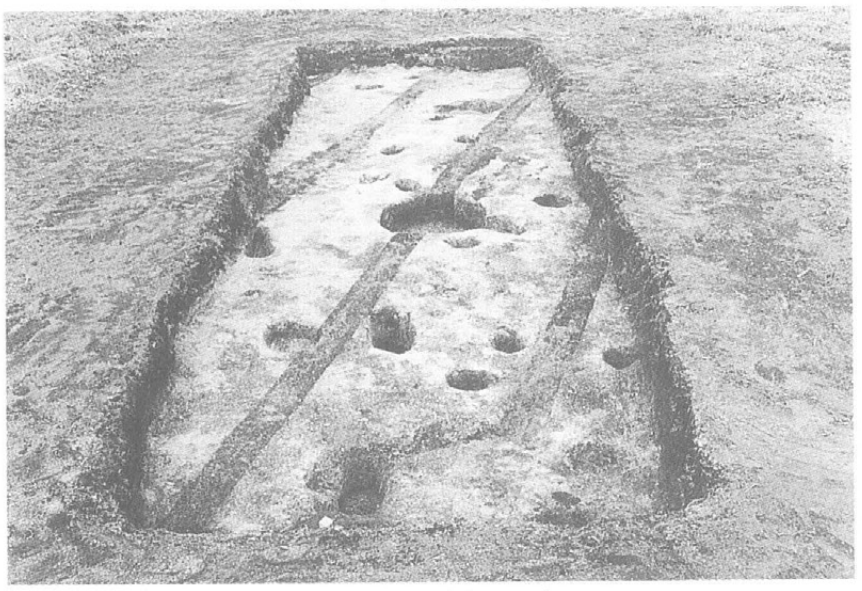
トレンチ11(南から)

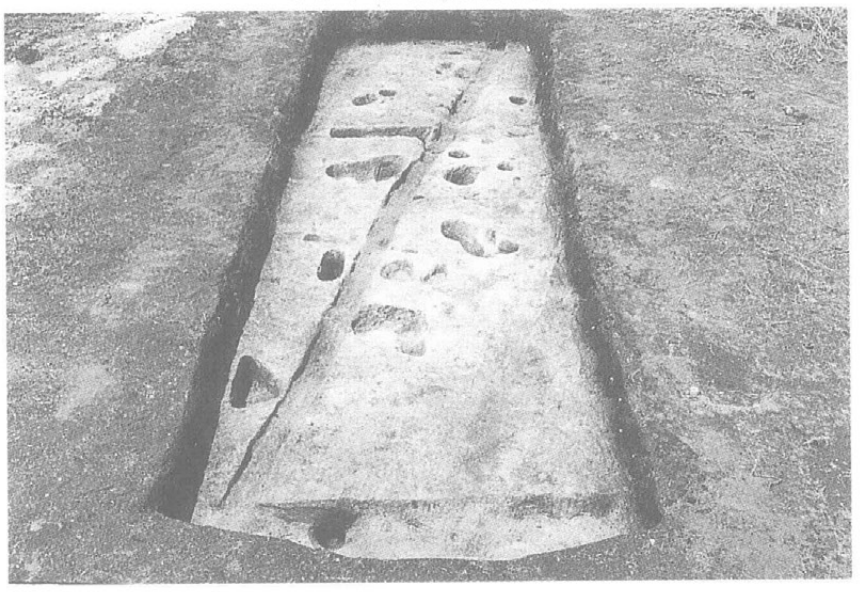

トレンチ12(南から)


トレンチ13(南から)

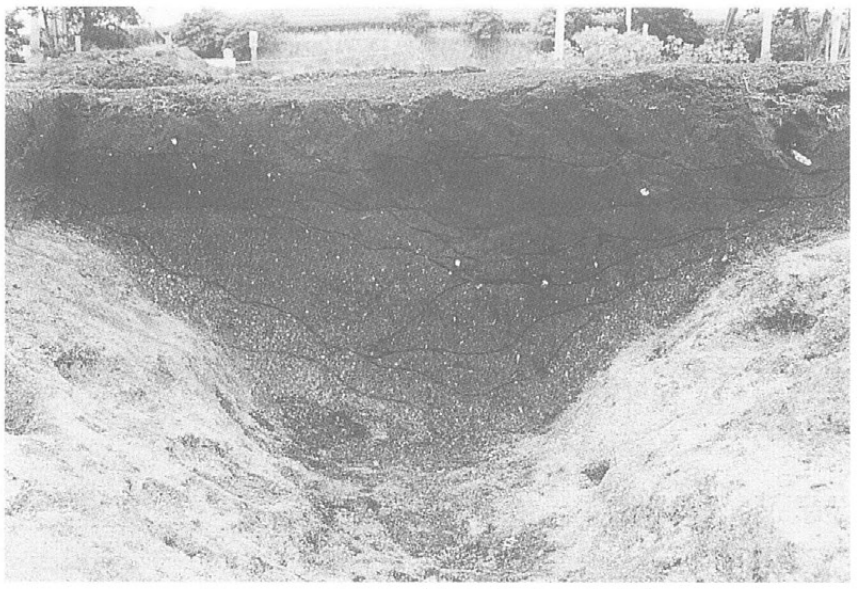

トレンチ14(南から)


トレンチ15(南から)


トレンチ16(南から)


トレンチ17(南から)

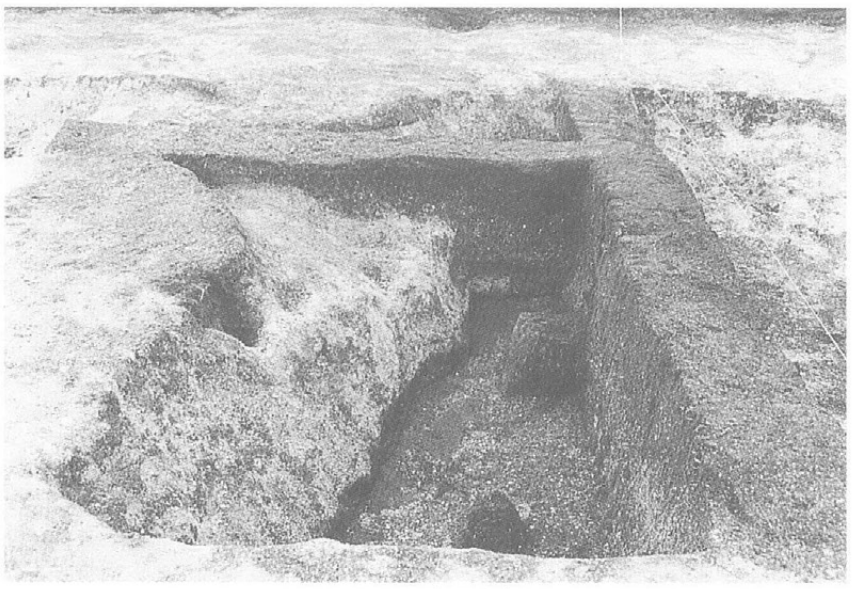
図版4



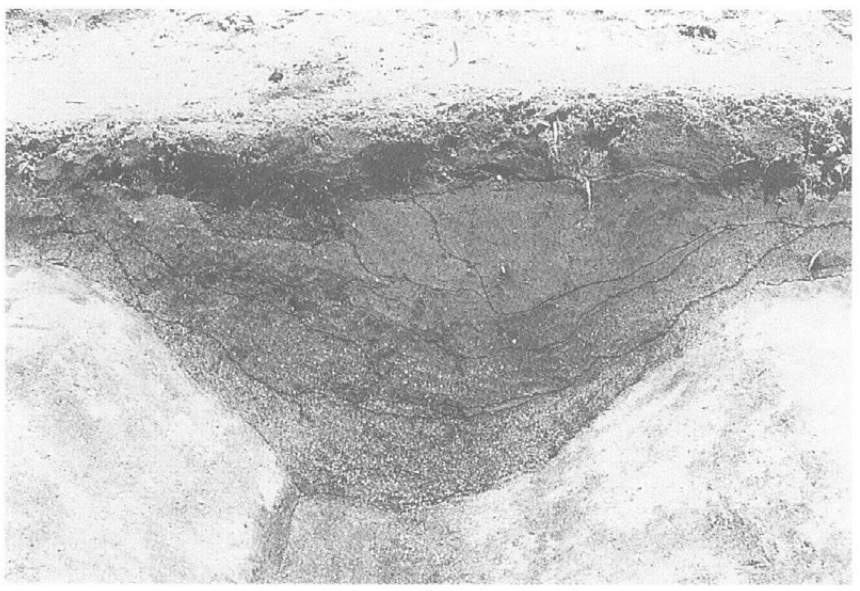
SE－1　SEC 1（トレンチ 3 東壁）

SE－1　SEC 2

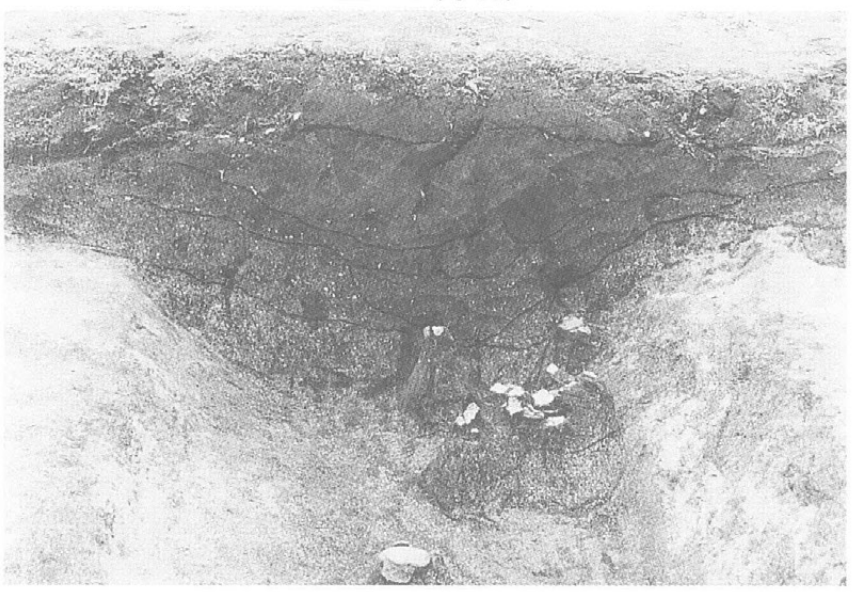
SE－1（西から）



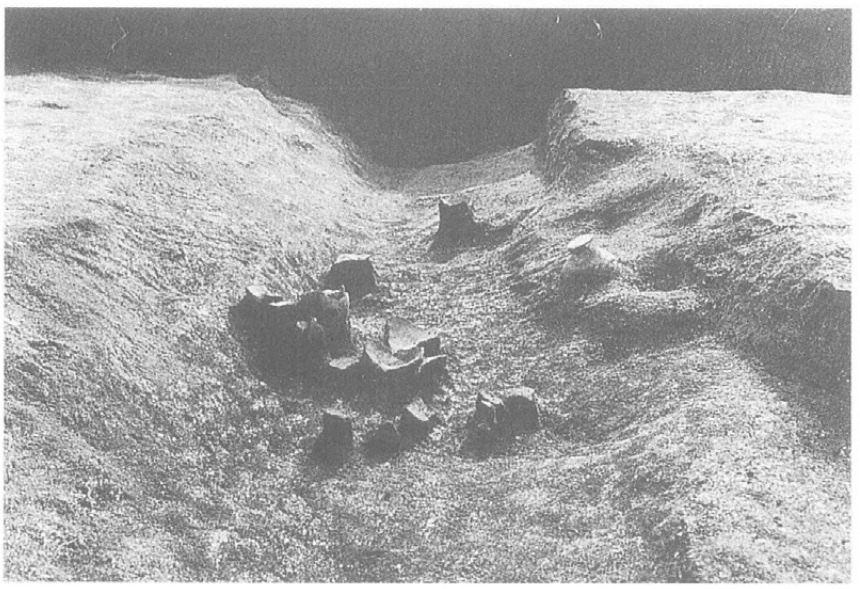
SE－1（中央）



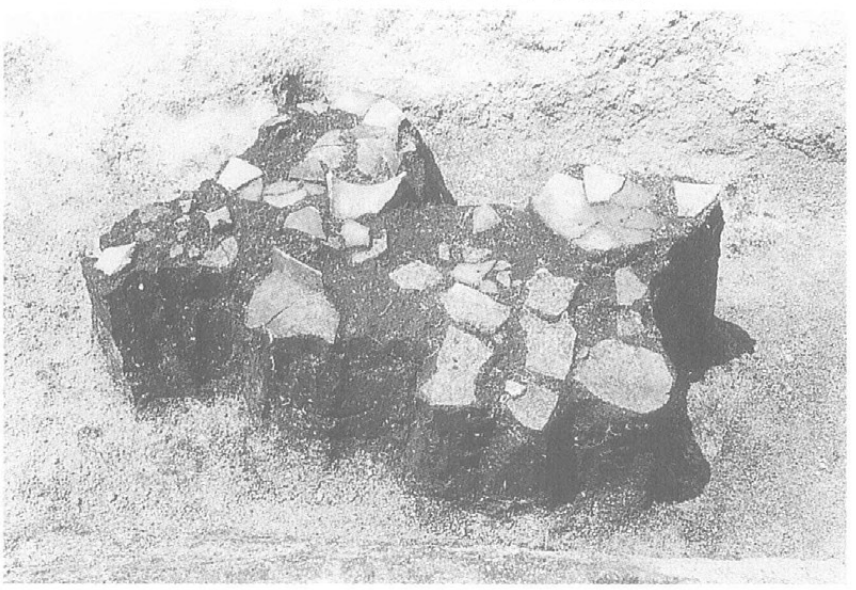
SE－1　SEC 4（トレンチ 8 東壁）



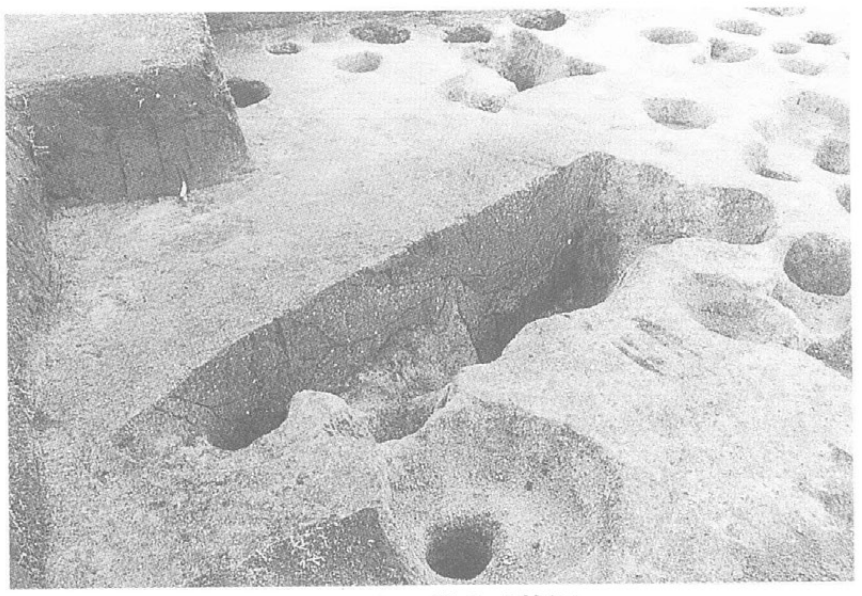
SE－1　SEC 5（トレンチ 9 東壁）



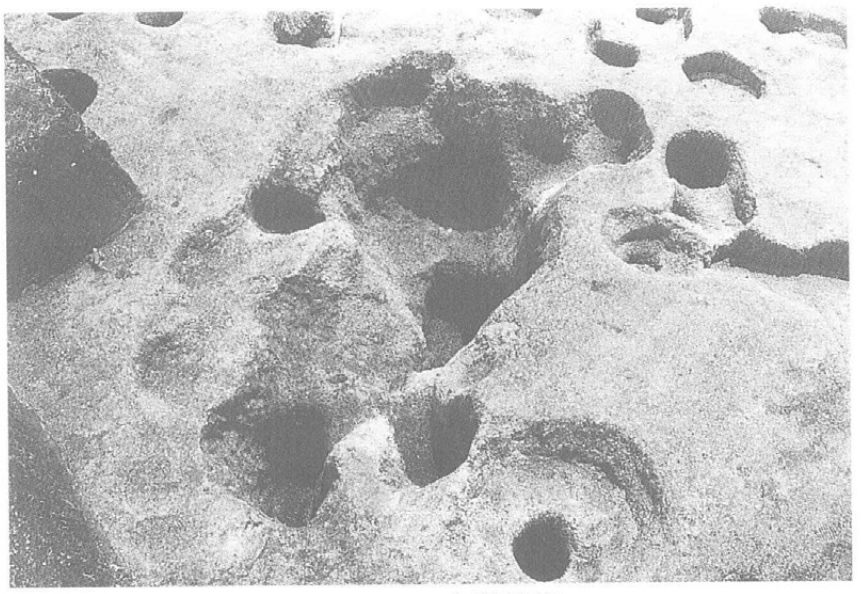
遺物出土状況（トレンチ 3）



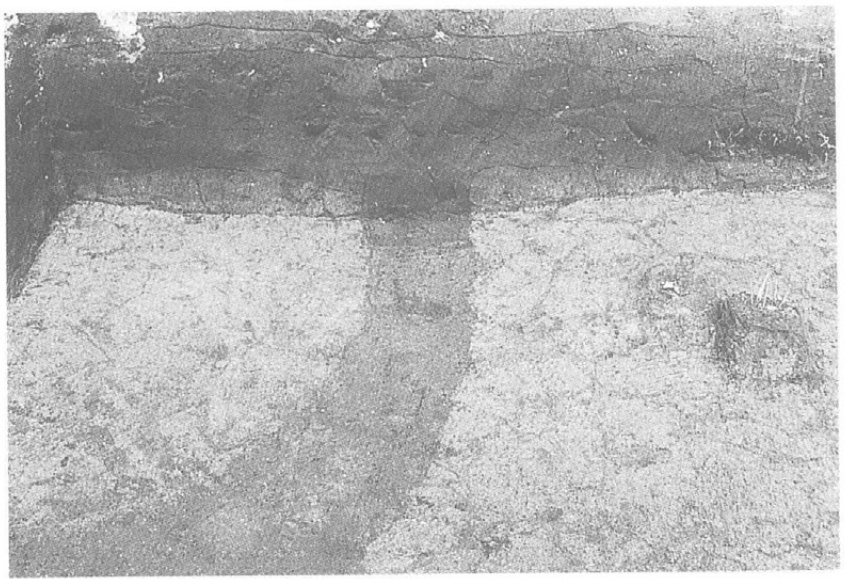
SE－1　遺物出土状況



SC－1　半サイ状況

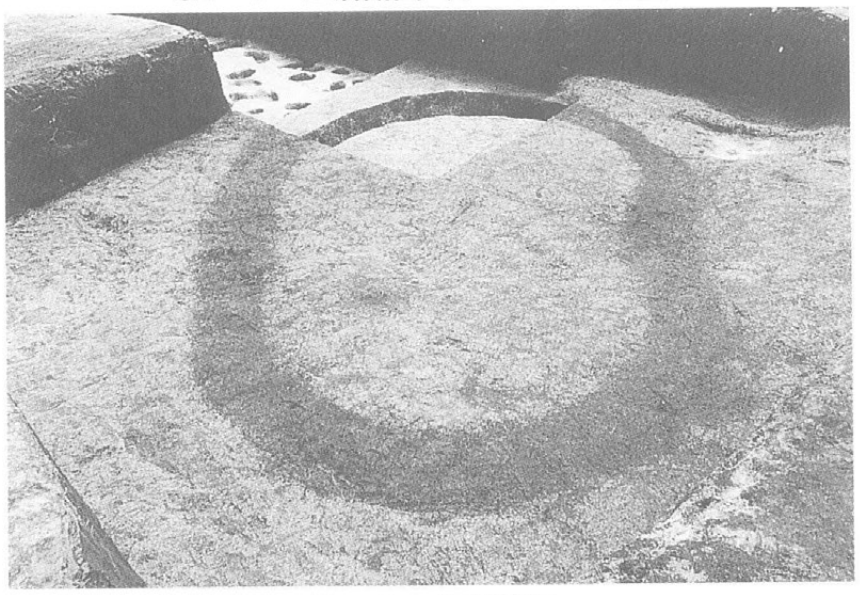


SC－1　完掘状況



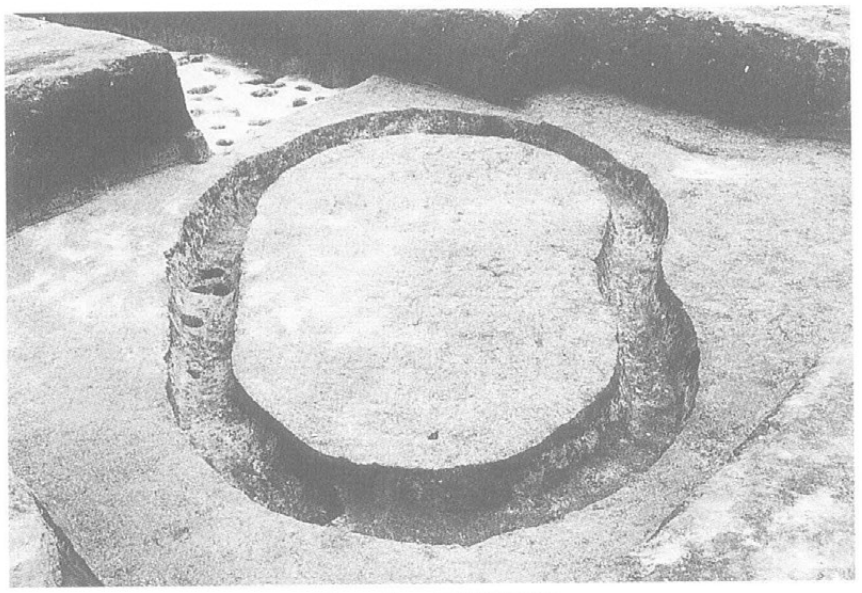
SL－1　土層断面（トレンチ11東壁）

SE－1　完掘状況（西から）



SL－1　検出状況

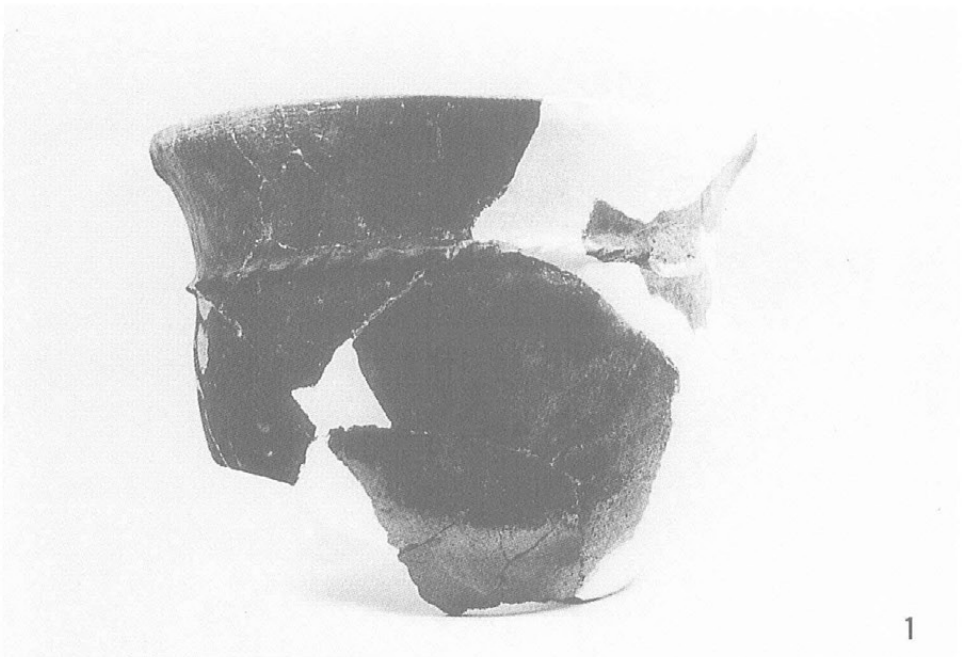
SE－1（中央から東を撮影）



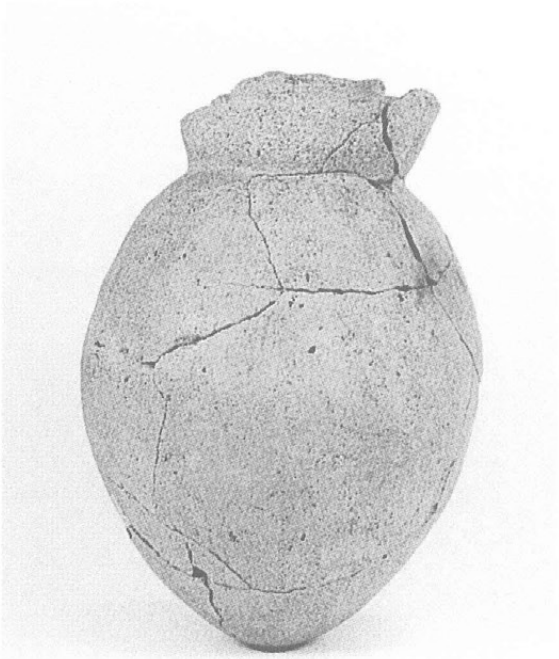
SL－1　完掘状況

SE－1（中央から西を撮影）

図版6

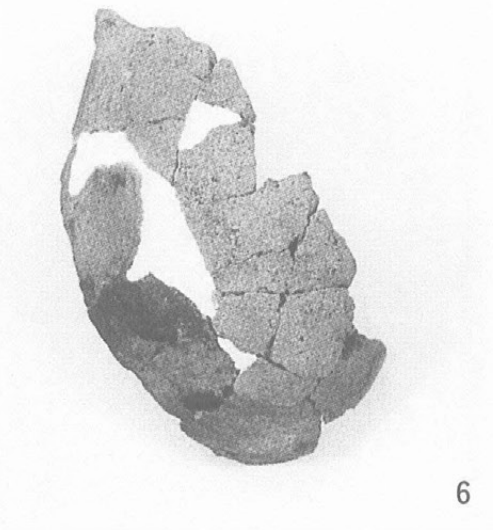

1

3


7

8

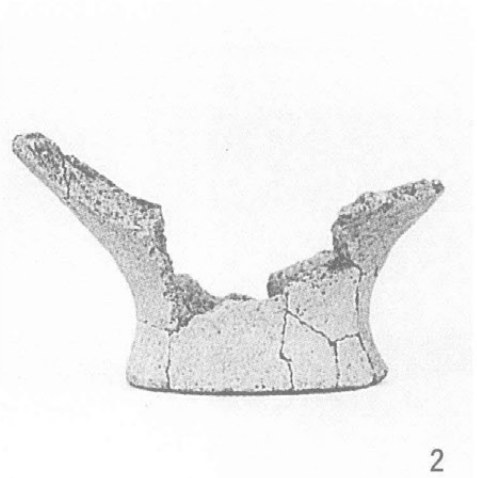
6

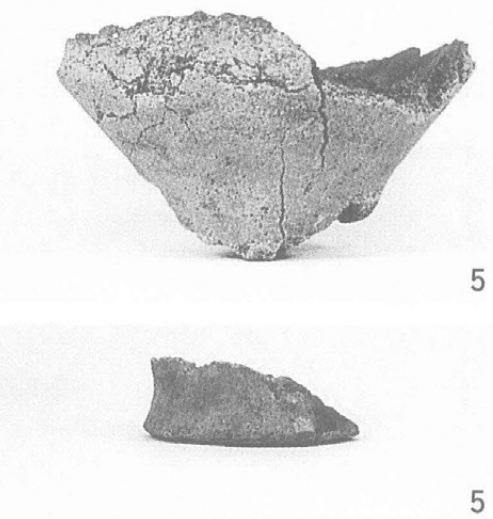

6

9

10

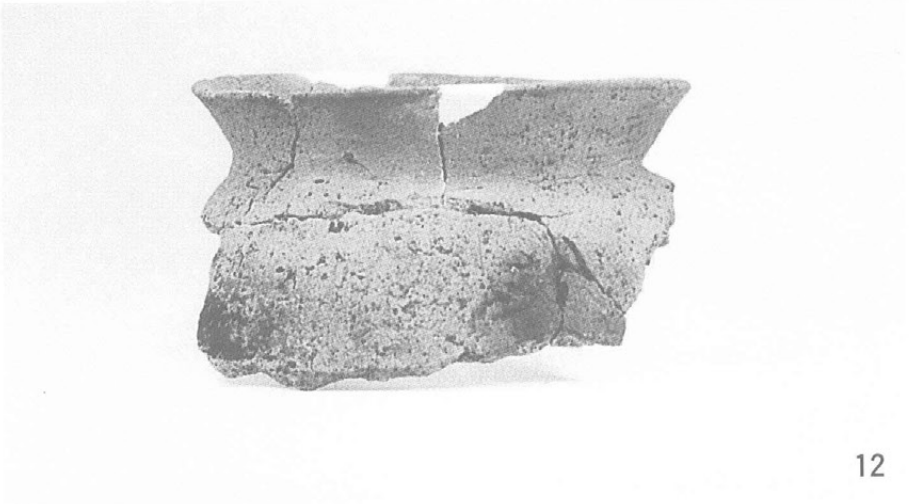
4


2

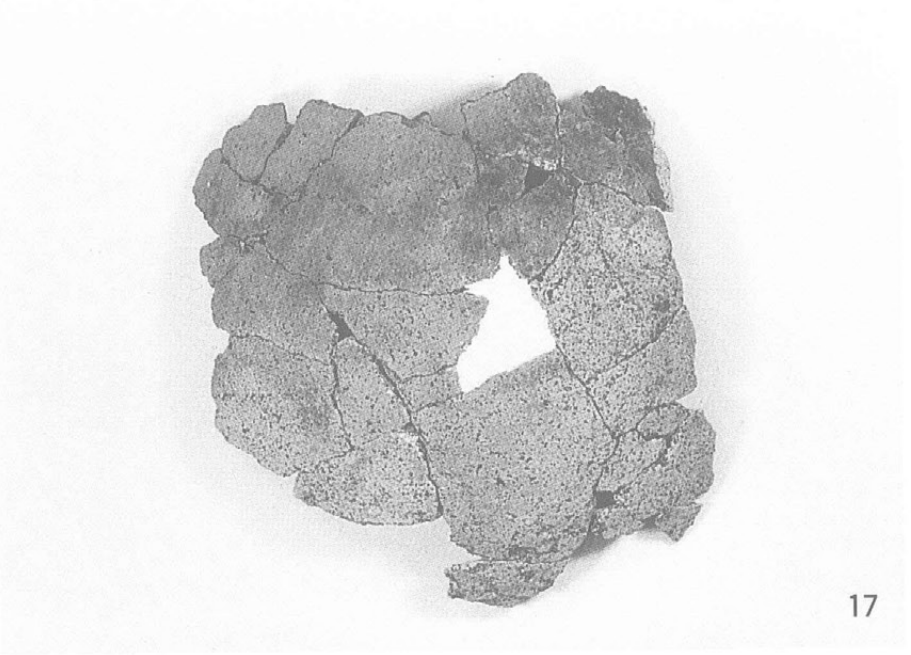

5

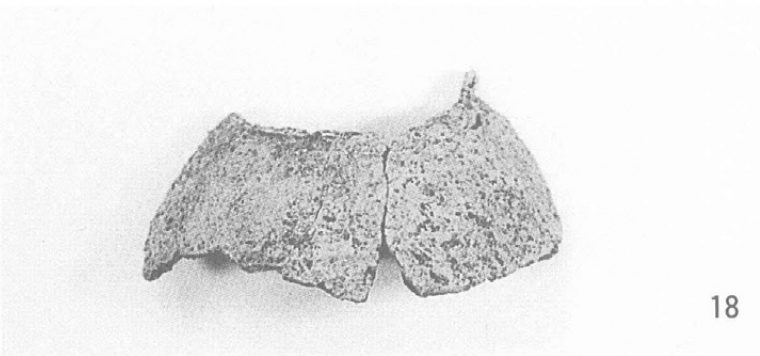
5

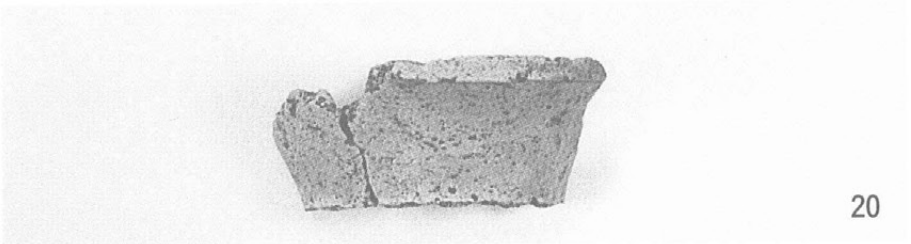
11

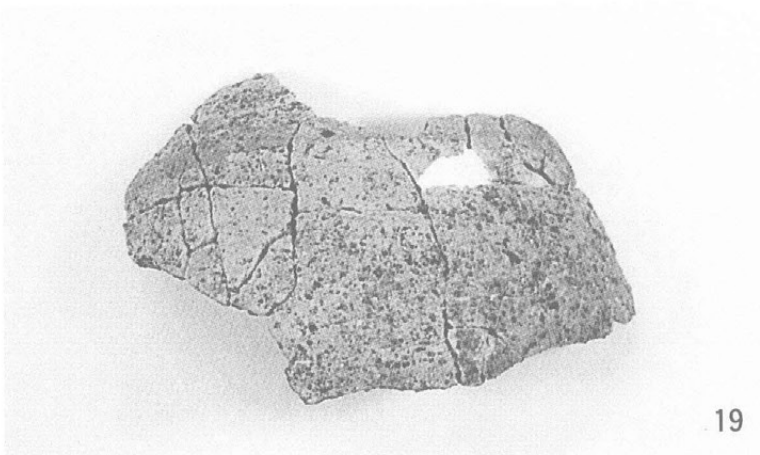

12

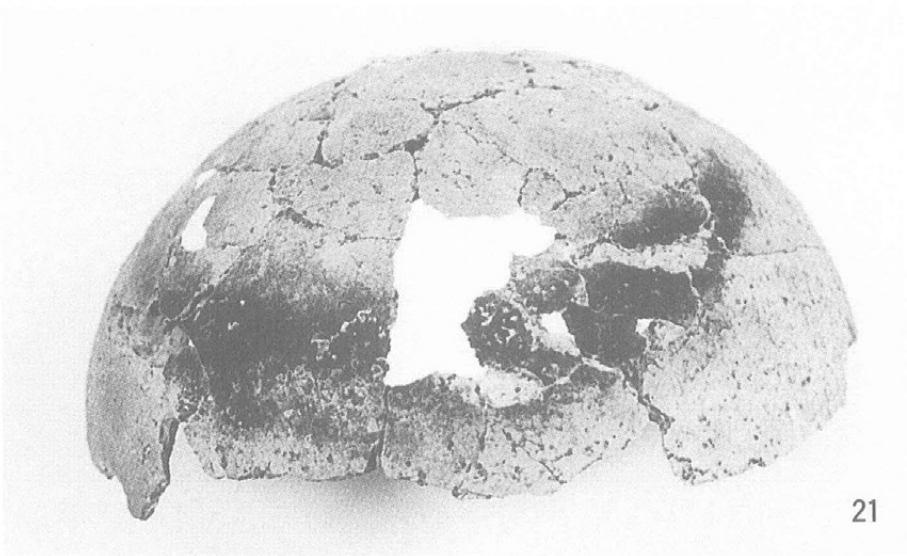
16

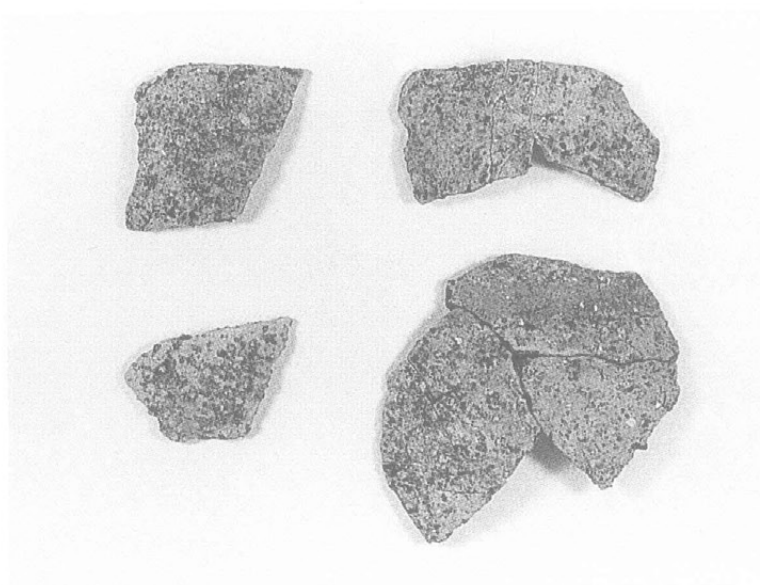

17

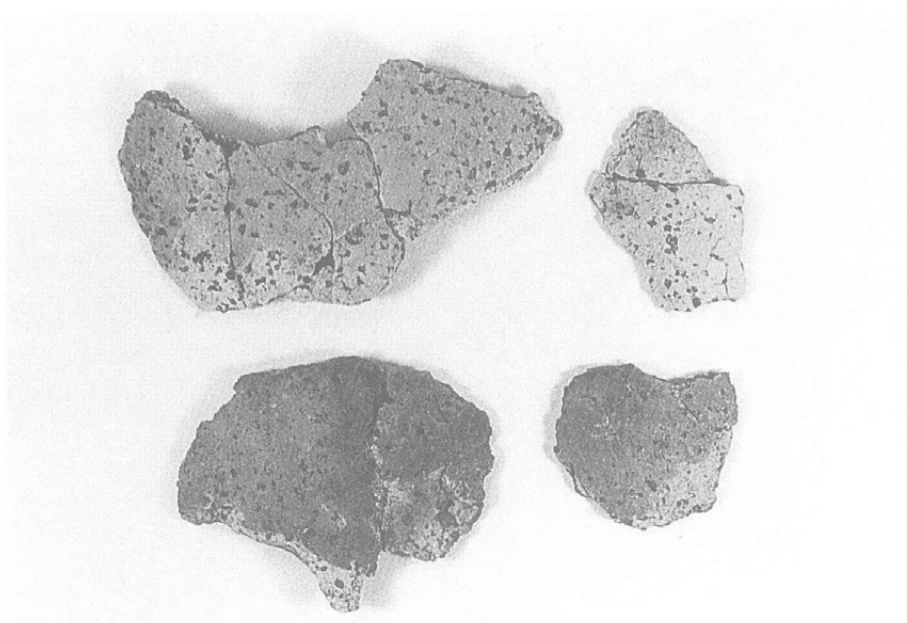

18


20


19


21

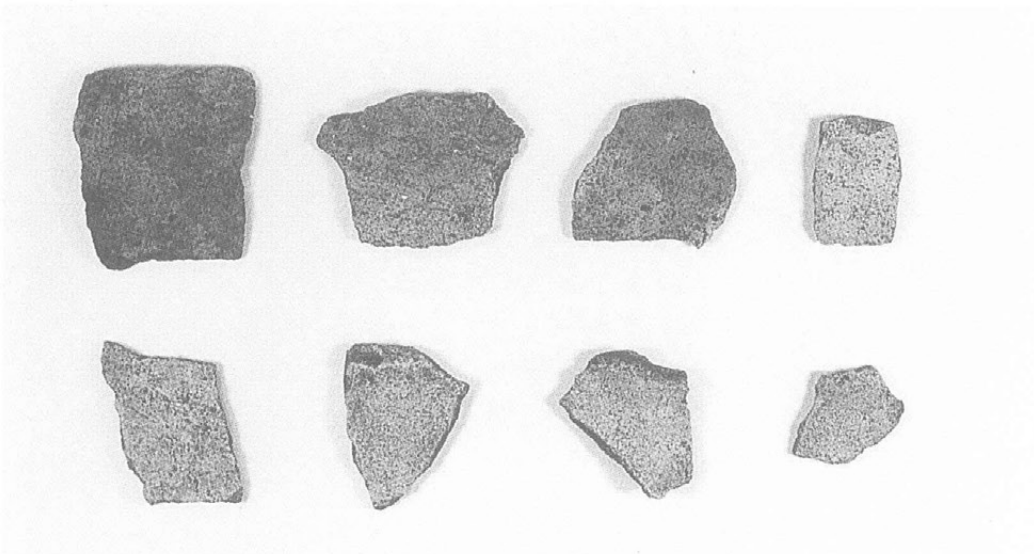

18・19と同一個体


20・21と同一個体

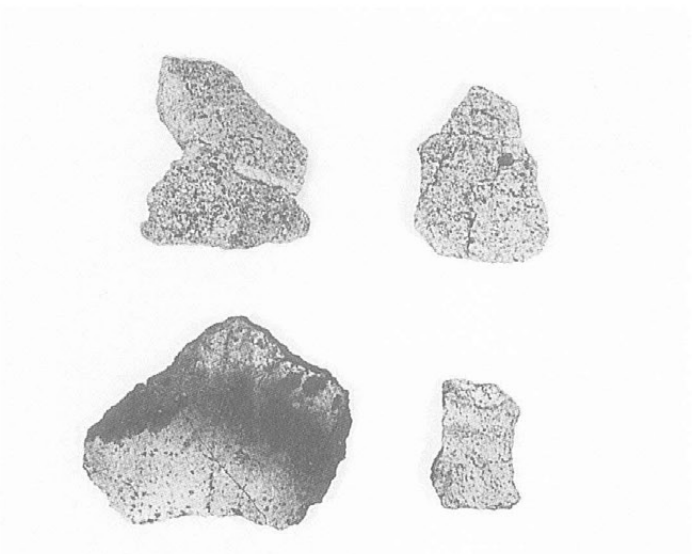
図版8

弥生土器（タタキ）

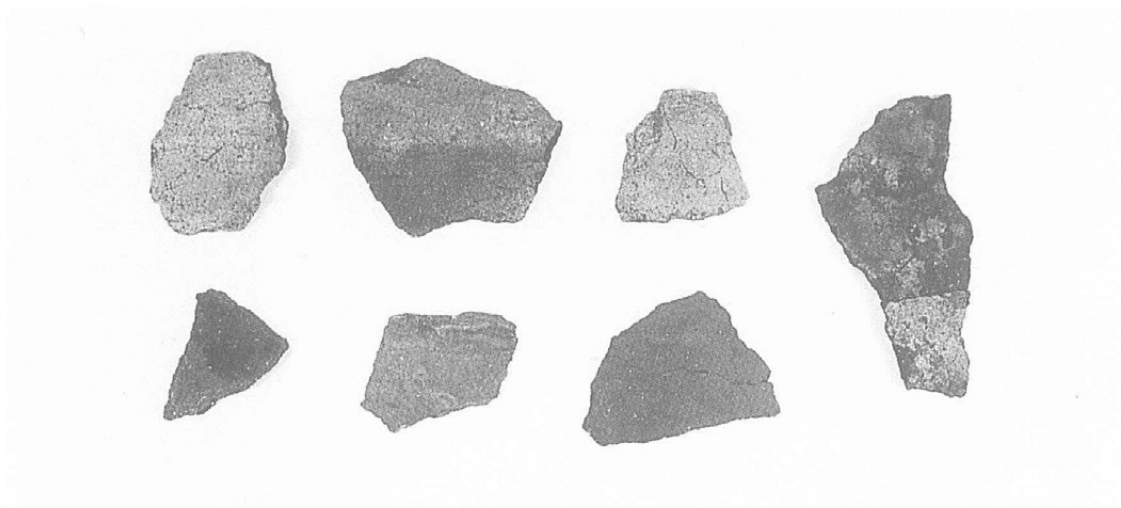
弥生土器



弥生土器

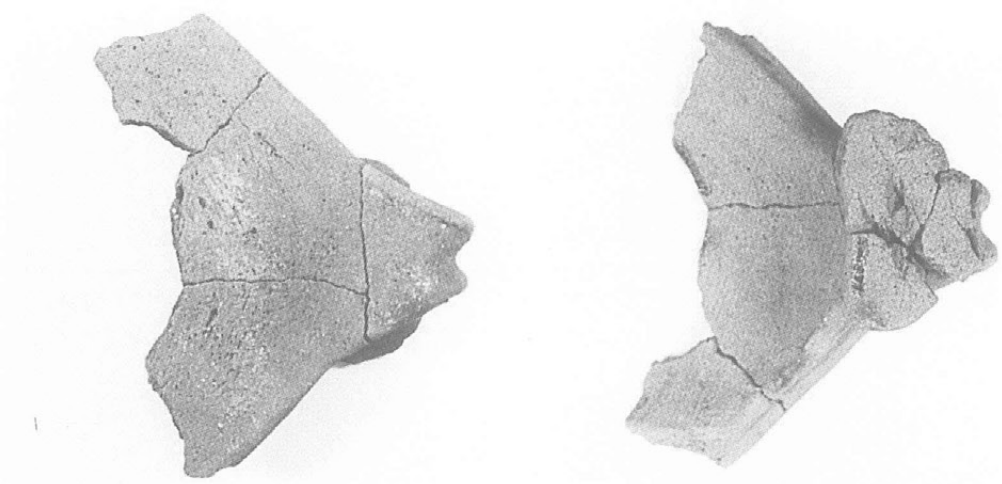


弥生土器



縄文土器（晩期）

縄文土器（晩期）



（外面）　（内面）

縄文土器（後期）

縄文土器（後期）

報告書抄録

フリガナ	スワマワリダイ１
書名	諏訪廻第１遺跡
副書名	町営墓地公園建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書
シリーズ名	三股町文化財調査報告書
シリーズ番号	第２集
編集者名	黒木　欣綱
発行機関	三股町教育委員会
所在地	宮崎県北諸県郡三股町五本松１－１
発行年月日	2000年３月31日

所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
諏訪廻第１遺跡	北諸県郡三股町 大字蓼池字諏訪廻	31°44′27 付近	131°07′23 付近	1999.4.26 ～ 1999.7.26	1,210㎡	町営墓地 公園建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	縄文 弥生 古墳	構状遺構　2 周溝状遺構　1 土坑　1	縄文土器 弥生土器 土師器	

三股町文化財調査報告書　第2集

諏訪廻第1遺跡
－町営墓地公園建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書－

2000年3月

発行　宮崎県三股町教育委員会
〒889－1995
宮崎県北諸県郡三股町五本松1－1
TEL　0986－52－1111

印刷　有限会社　大広印刷
〒889－1912
宮崎県北諸県郡三股町大字宮村2820－9
TEL　0986－52－0001